

その他の研究・報告

山梨県富士・東部保健所実習を通じた地域公衆衛生学の習得と地域連携

渡邊利明（医療科学部 柔道整復学科・医学教育センター）・佐藤光浩・市ヶ谷武生・鎌塚正志

佐野秀明・舟喜晶子・富田圭佑・杉浦加奈子・竹内仁・昇寛・樽本修和（医療科学部 柔道整復学科）

キーワード：保健所実習，地域保健，地域貢献，公衆衛生学，レポート抽出法，パレート分析

1. はじめに

公衆衛生学は地域保健活動や国単位の保健活動を通じて、地域住民や国民の健康保健を向上させる学問であるが、特に柔道整復師は他の理学療法士や作業療法士と異なり、その業において「患者との初対面での評価・診断」を求められる特徴から、公衆衛生学は国家試験において必須出題科目である。ここでこの柔道整復学科を含む本学東京西キャンパスの医療科学部は、山梨県地域医療における医療・保健・福祉についての医療資源として養成することが目的の一つであり、当然当該地域の医療における公衆衛生学的内容の実践が柔道整復師養成において連携されなければならない。したがって、地域医療人養成系学部における公衆衛生学の講義実習の地実研修を充実させ、また地域保健を理解するために、その地域医療の中核たる保健所における地実研修・見学は必要なことである。また、柔道整復師は開業から閉業の際、保健所への申請や査察等、大変重要な申請業務に保健所がかわり、非常に保健所業務とは関連が深い。また、保健所側としても保健所業務のうち、保健所の一般広報業務や上記地域医療者養成機関や医療従事者に対する広報活動も行う必要があった。しかしながら、本学東京西キャンパスと当地域担当の山梨県富士・東部地域保健所では、現在まで地域医療実践に必要な地域保健所の実践的見学・実習や学術的連携を行ってこなかった。そこで、当柔整学科では、2年時に開講する公衆衛生学および関連するフレッシュセミナーⅡの講義時間を使用して、1コマ(90分)の事前講義の後、3コマの保健所見学実習を行い、公衆衛生学で習得する保健所業務、環境衛生業務をはじめとする一般保健所業務に加えて、当山梨県富士・東部保健所管轄独自の公衆衛生業務・環境衛生業務についてレクチャーを受け、実際に保健所内での地実見学研修を行った。

2. 目的

本学本学科の公衆衛生学教育は2年時前期に行われ、特に6月半ば以降の後半は行政保健、環境保健、地域医療の分野であり、この保健所見学実習は事前講義で示した地域医療や環境保健の学問上の理論を検証し、再構築する上で欠かせない教育方法である。また、保健所としても広報活動や地域保健に従事する医療従事者の養成において貢献するという相互連携を行う欠かせない機会である。そこで、今回行った見学実習の成果を分析し、今後の公衆衛生学的内容の取得と、我々教員側の大学公衆衛生教育と保健所との地域保健業務を介した両者の連携推進に役立てたい。

3. 方法

1) 対象：平成27年度入学の柔道整復学科2年生全25名

2) 見学実習の構成

①日時 平成29年6月27日 13:00-16:00

②場所 山梨県富士・東部保健福祉事務所(山梨県富士・東部保健所) 会議室および所内

③見学実習の目標

公衆衛生学見学実習の基本方針として、一般的保健所業務の知識の習得、山梨県東部地域における医療従事者の社会医学活動の様子を実地で公衆衛生活動を行う保健所幹部等から講義を受け、見学を行うことによって理論上の公衆衛生学の学習の習得をより深める。最終的には地域保健を担うべき医療従事者の養成を助長する。

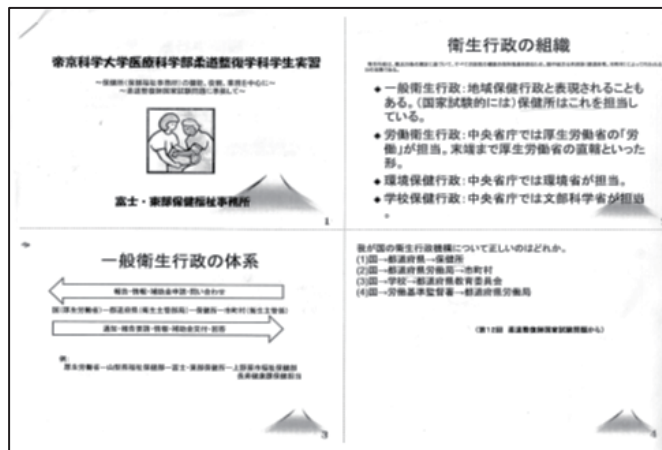
④見学実習のプログラム

短時間の中での保健所の機能を理解させるために、保健所担当者に見学実習の趣旨・目標を伝え、プログラムを作成していただいた。(表1-1：平成29年度帝京科学大学医療科学部柔道整復学科 富士・東部保健所見学実習プログラム) 特に、Bにおける保健所(保健福祉事務所)の機能、役割、業務を中心に、当方の希望を組んでいただき、学生の当面の目標である国家試験問題に準拠してプログラムを構成・プリントしていただいた(表1-2)。

表1-1. 実習見学プログラム

平成29年度帝京科学大学医療科学部柔道整復学科 山梨県富士・東部保健所見学実習プログラム	
A. 導入講義	
1. 山梨県富士・東部保健所の概要・職務内容について：嶋津主任	
B. 保健所長講義：櫻井保健所長	
2. 保健所(保健福祉事務所)の機能、役割、業務を中心に ＜国家試験問題に準拠して＞	
①衛生行政体系 ②人口統計 ③保健所業務内容	
④管轄区域 ⑤保健所・保健センター ⑥危機管理	
⑦学校保健 ⑧保健所歴史 ⑨産業保健 ⑩保健所の将来	
⑪保健所トリア ⑫地域保健法体系 ⑬保健所の医療資格者	
⑭衛生保健 ⑮保健所の組織	
C. 保健所内見学(重点見学課)	
①福祉課→②長寿介護課→③衛生課→④地域保健課→⑤健康支援課	

表 1-2. 公衆衛生学国家試験準拠の講義プリント(全 22 項目)：保健所長作



3) データの収集・分析

保健所見学実習施行日から 3 日後に行い、すぐに回収したレポート課題(表 2)の文章から、より内容として具体的な項目である①保健所長の講義で印象に残った項目(表 1-1 保健所長講義項目①～⑮の項目別)を数量限度なしで記入させた。②保健所見学実習全体(研修のまとめ)での印象に残った項目(自由項目)を数量限度なしで記入させ、すべて抽出し解析した。

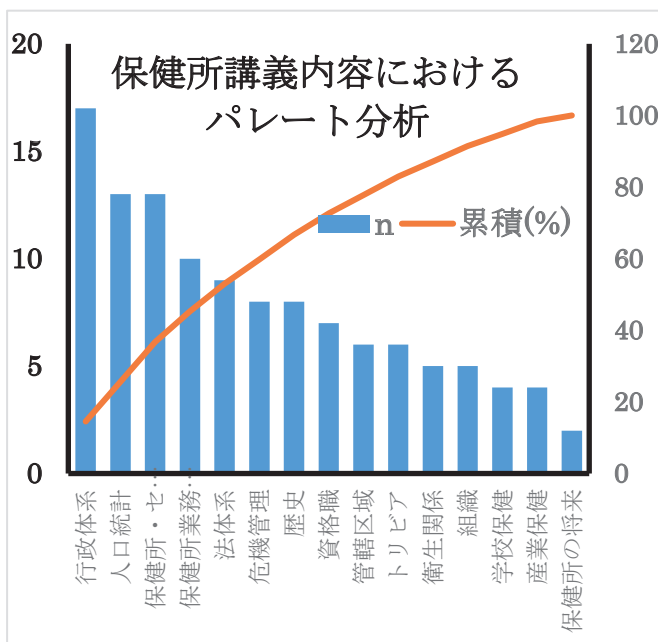
解析方法は、レポート各項目別の頻度数(n)からの平均値を算出し、分散分析およびパレート分析を行った。

表 2. レポート用紙

平成 29 年度 公衆衛生学 保健所実習 レポート	
帝京科学大学 医療科学部 柔道整復学科	
番号	氏名
1. 日時 :	
2. 実習場所 :	
3. 研修内容 :	
①保健所の概要 ②保健所長の講義 ③保健所内施設	
4. 研修のまとめ	

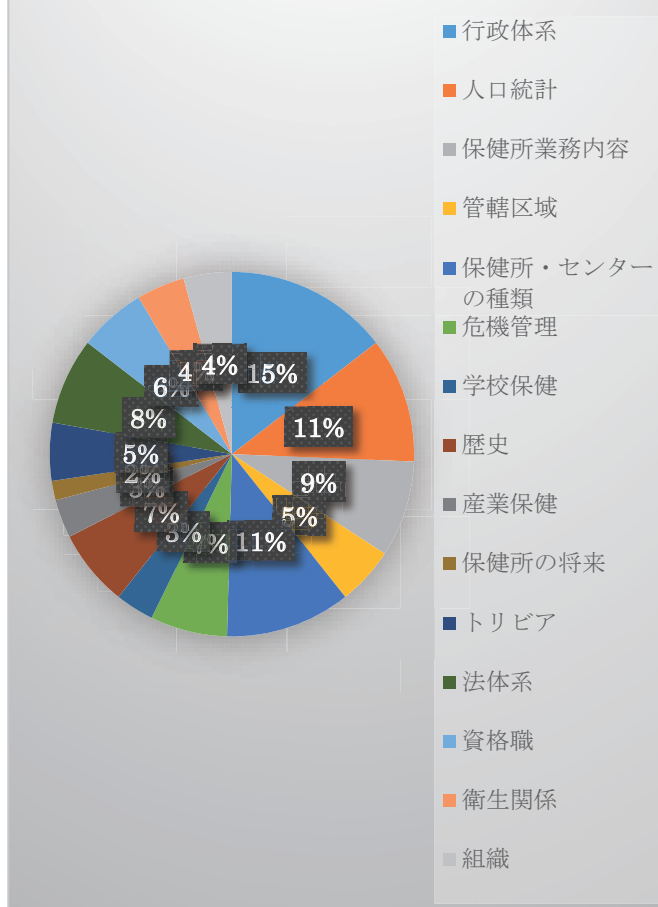
グラフ 1 各項目キーワード累積数および頻度%(累積数×100/総数(=117))

(1)保健所内講義の印象



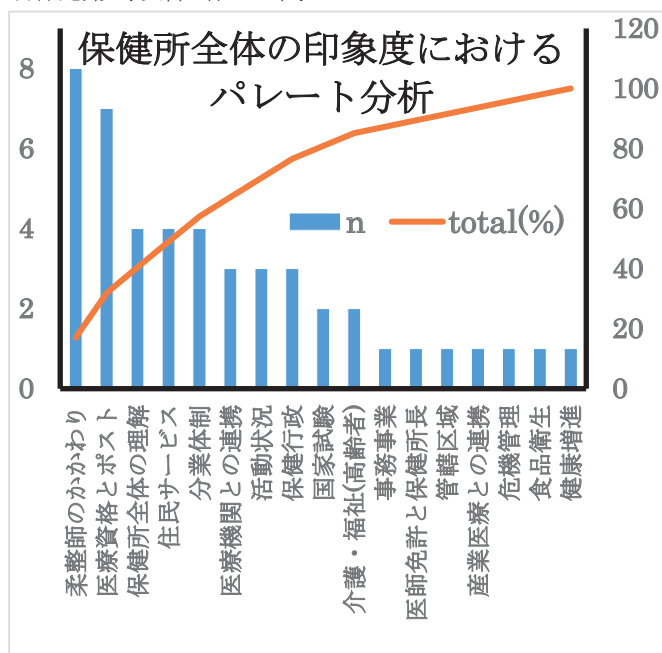
グラフ 1-1-1. 各項目の累積数(n)およびパレート分析

保健所講義での印象度(%)

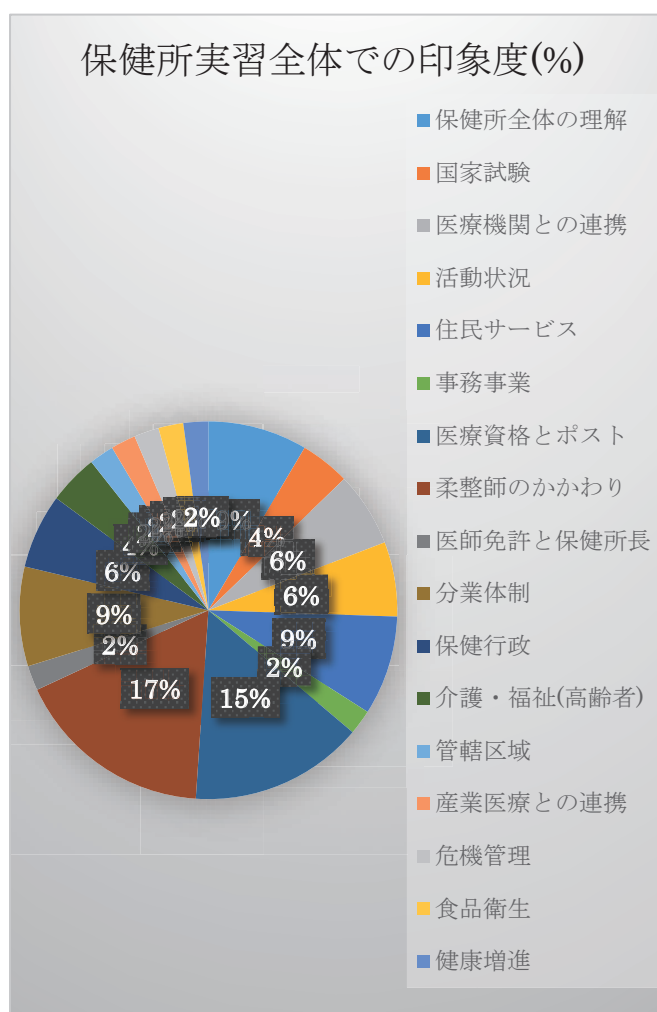


グラフ 1-1-2. 保健所講義での印象, 各項目の頻度(%)

(2)保健所見学実習全体での印象



グラフ1-2-1 保健所見学実習全体での印象、各項目の累積数(n)



グラフ1-2-2 保健所見学実習全体での印象、各項目の頻度(%)

4. 結果

①保健所長の講義に関して

グラフ1-1-1より各項目別の値から、合計117、項目15であり、項目平均値は7.8であったので、7.8以上の累積値を示す上位7項目(行政体系、人口統計、保健所・センターの違い、保健所業務、地域保健法体系、危機管理、保健所トリビア)であった。これらの累積頻度(%)はグラフ1-1-2より全項目の66.6%を占めていた。また、これらのパレート分析(グラフ1-1-1 累積曲線)での70%成分項目でもあった。しかしながら、この母集団上では分散が大きく、標準偏差は4.06であったので、変動係数((平均値/標準偏差)×100)が高く(52%)、これらの値の散布幅が大きいので、この母集団内での特異的・代表的な項目とは考えられない。この結果、これら上位7項目のなかで、母集団平均値の区間推定を行える両側検定を用いると、最上位代表項目境界値が平均値+(標準偏差/2)=7.8+2.03=9.83となり、最上位項目は9.8以上の4項目(行政体系(17)、人口統計(13)、保健所・センターの違い(13)、保健所業務(10))となった。()内は項目ごとの累積数を表す。以下同様。この4項目の全体に占める累積頻度(%)は45.2%であった。

②保健所見学実習全体に関して

グラフ1-2-1より各項目別の値から、合計47、項目17であり、項目平均値は2.8であったので、2.8以上の累積値を示す上位8項目(柔道整復師と保健所の関連(8)、医療資格と保健所内ポスト(7)、保健所全体の理解(4)、住民サービス(4)、保健所内分業体制(4)、医療機関連携(3)、保健所市中活動(3)、保健行政(3))であった。これらの累積頻度(%)はグラフ1-2-2より全項目の76.6%を占めていた。た、これらのパレート分析(グラフ1-2-1 累積曲線)での70%成分項目でもあった。この母集団上では分散が大きく、標準偏差は2.14であったので、変動係数((平均値/標準偏差)×100)が高く(76%)、これらの値の散布幅が大きいので、この母集団内での特異的・代表的な項目とは考えられない。この結果、これら上位8項目のなかで、母集団平均値の区間推定を行える両側検定を用いると、最上位代表項目境界値が平均値+(標準偏差/2)=2.8+1.07=3.87となり、最上位項目は3.9以上の5項目(柔道整復師と保健所の関連(8)、医療資格と保健所内ポスト(7)、保健所全体の理解(4)、住民サービス(4)、保健所内分業体制(4))となった。この5項目の全体に占める累積頻度(%)は57.4%であった。

5. 考察

事前講義で示した公衆衛生学上の保健所項目が、保健所見学によりどのように具現化されて理解されたかを考察する。

①保健所長の講義に関して

結果①により、学生が保健所見学実習において印象に残った最上位4項目で全体の45%を占めていた。これらの項目は、行政体系(17)が最多であり、人口統計(13)、保健所・センターの違い(13)が同数、保健所業務(10)であった。

まず、保健所長の講義の内容が、「国家試験に準拠して行われた」と、および「地域の名称がふんだんに出現することによる地域への親しみやすさ」が基本的には講義全体の印象を決定したと考えられる。

これまでの座学による公衆衛生の内容による保健所講義では、国家試験内容はほとんど取り入れず、テキストの用語中心であったのに対し、国家試験内容を取り入れたことによる緊張感と身近な地名が出現する地域を見据えての講義には、学生の学習意欲への刺激が加わったのではないかと考えられる。

ここで、「保健所や衛生行政」が最多の印象を受けた理由として、保健所長の講義の際の最初の項目として出現しており、実際にも国家試験の公衆衛生学の範囲での出題順序も最初であることが多く、この理由として「地方行政や厚生労働省の保健所としての位置付けが、国家試験の重要な出題要件である」という保健所長の講義内容が、最初に学生の印象を深くしたのではないかと考えられる。やはり講義の内容順序の構成の仕方が素晴らしく効果的であると考えられる。また、彼ら学生にとって未知の役所である保健所が、大卒からの身近な職場として映り、「保健所に就職したい」という希望を持つ学生があらわれたことも保健所実習が医療家を目指す彼らに「健康を維持する保健所」としてのインパクトを与えた結果であると考えられる。

続く「人口統計」の項目が多く出現した理由としては、本保健所での講義において「保健所が管轄する人口動態統計は、がん検診、予防接種、乳幼児健診、母子手帳等々の健康と向き合っていく様な仕事は、保健所が最終的に責任を持つ生と死に結びつく」という「診断や予防と生や死についての関連性のある役所」という講義内容をされた結果、学生は印象に残り、知識としても蓄積されると考えられる。また、大学での事前講義として母子手帳や母子保健法の講義を行ったことも学生の印象度が高い一因となっているが、若年人口の増減とともにこれら地域に関して関心が高いことが示されたと考えられる。

「保健所と保健センターの違い」については、本学の学生（特に本学科の学生）の3/4は山梨県の出身であることを踏まえたうえで、地域保健法とともに講義を行い、なぜ「保健センターなのか」「保健センターは保健所の下部組織ではない」旨の講義と山梨県富士・東部地区の保健センターがどこにあるかを具体的に人口の増減等とともに示しながら講義されたことによって、上記「人口統計」同様に身近な地域保健の在り方を学生なりに興味を示している結果であると考えられた。

②保健所実習全体の印象について

保健所実習全体では、5種類の項目が挙げられた。このうち、柔道整復師と保健所の関連(8)および医療資格と保健所内ポスト(7)、保健所全体の理解(4)、住民サービス(4)、保健所内分業体制(4)のなかで、累積頻度としても柔道整復師と保健所の関連(8)および医療資格と保健所内ポスト(7)がその他の2倍程度の累積数を示していたので、この2項目について考察する。

緒言でも述べたように、柔道整復師は他のパラメディカル資格である理学療法士や作業療法士と比べると、市中で「開業できる」医療従事者であり、学生のはほとんどは将来の希望として「市中での開業」を望んでいる。また、同じく緒言でも述べたように国家試験の中に公衆衛生があるメディカル資格は厚生3師（医師、歯科医師、薬剤師）を除くと、看護師、保健師、柔道整復師であり、保健所の出題頻度が高いのは柔道整復師であるだけに、国家試験内容および開業する際の保健所との関連は学生としても非常に興味の湧くところであったと考

えられる。そのせいもあって、当日講義後の学生からの保健所長への質問の中に「なぜ、保健所のポストに理学療法士があって柔道整復師がないのか」という質問があり、「学生としても柔道整復師に誇りをもって勉強しているのですね」という所員の方の感想をいただきました。その裏を返せば、学生としても将来「柔道整復師として」保健所での地域社会貢献をして自分の力を出したいという意気込みが感じられたことは、保健所や地域保健を実際に行っている場所である保健所に行き感じることによって、座学では得られない地域に根差した「将来へのモチベーションをもった」学習効果が出現したと考えられる。

6. まとめ

公衆衛生学の学習を目的とした保健所見学のよって以下のことがまとめられた。

- ①保健所機能の中での地域性のある項目（人口統計、保健センターと保健所の違い）について学習効果が高く出現した。
- ②保健行政がもたらす地域的保健能力を発揮する将来の職場としての関心が高い。
- ③検診や予防接種等の地域の健康に不可欠な項目、その効果に対する保健所のフィードバック検索の役割についての関心があった。
- ④地域の健康保健に関する核としての保健所を地域連携の場として考えることへの関心があった。

謝辞

この保健所見学実習は、山梨県富士・東部保健所のご厚意によって実現させていただきました。所長櫻井先生には講義と講義用に編集してくださいましたプリントを作成していただき、またこの報告書に転載させていただきました。厚く御礼申し上げます。また、主任嶋津先生には種々の手続きや保健所内のご案内をいただきました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

地域包括ケア推進を目指し多職種で取り組んだ「健康フェスタ in せんじゅ」

定村美紀子・糸井和佳・佐藤亜月子・野田義和（医療科学部 看護学科） 永田あかね（大内病院）
吉賀成子（医療科学部 医療福祉学科） 小島尚・小林和生（生命環境学部 生命科学科）
濱野佐代子（生命環境学部 アニマルサイエンス学科） 上田玲子（教育人間科学部 幼児保育学科）
浅見恭史・霜越千裕（足立区薬剤師会） 山川百合子（茨城県立医療大学）

キーワード：地域包括ケア、多職種連携、ヘルスプロモーション

1. はじめに

少子高齢社会が進む中、千住キャンパスが所在する足立区千住地域においても高齢者の独居世帯が増加する傾向にある。そのような中で平成27年度より毎月一回、本学3号館1階ホールにおいて看護学科教員と足立区地域包括支援センター千住本町の職員がボランティアと共に「せんじゅカフェ」を運営している。カフェは認知症の方やその家族が気軽に参加でき地域の人々が認知症に関する理解を深める場であり、認知症に携わる専門職が参加者を対象に健康教育を実施するなど学生の実践的な学びの場となっている。本事業は、これまでの活動を発展させて大学と地域との連携を深め地域包括ケアを推進するための基盤づくりを行うことを目指して実施した。

2. 企画したプロセス

地域包括ケアの推進において重要なことは、住民の主體的な参加とそれを支える多職種の連携である。災害などの社会問題は、当該問題のステークホルダーと科学者が協働して取り組むことが重要で大学が地域に果たす役割が大きい¹⁾と言われている。本企画は、足立区薬剤師会と本学との連携²⁾など地域活動で培ったネットワークをもとに住民の健康意識の向上を図ることを目指して保健・医療・福祉・教育の現場で活躍する人々と知恵を出し合いながら動き始めた。楽しみながら健康づくりに取り組める企画というコンセプトをもとに準備を進める中で協力者の輪が広がっていった。学内においても看護学科、生命科学科、アニマルサイエンス学科、幼児保育学科、医療福祉学科など所属を超えて協力を得ることができた。多様な意見を取り入れ話し合う中で実施する内容が具体的になり平成30年3月18日（日）に千住キャンパス7号館で本事業を実施することを決定した。

3. 活動内容

1) 広報活動

「住み慣れた地域で安心して健やかに暮らし続けるために保健・医療・福祉の専門職と認知症の予防や健康づくりについて考えてみませんか？入場料無料、予約なしでどなたでもお気軽にお越しください」見守り、助け合い、多職種連携、「健康フェスタ in せんじゅ」というテーマで高齢者以外の方も参加できる内容のチラシ（図1）を作成し千住キャンパスのある地域を担当する足立区地域包括支援センター千住西の協力を得て各世帯に配布した。また、2月のせんじゅカフェの参加者に実施する内容をアナウンスした。大学周辺の薬局や高齢者施設、地域包括支援センター千住本町のスタッフにもチラシの掲示や配布を依頼して広報活動を行った。



図1. 健康フェスタ in せんじゅのチラシ

2) 協力者の背景

足立区薬剤師会、茨城県立医療大学、アロマセラピストなど日ごろ連携をとっている専門家に本企画について相談し専門とするテーマの展示や健康測定の内容や健康相談の担当を依頼するなど学内外の様々な方に協力を求めた。また、事前の準備や当日ボランティアとして参加できる方を紹介してもらうなど運営スタッフの要請を行った。一方、学生にもボランティアを呼び掛け、本看護学科の学生や近隣の薬局で実習を行っている薬学部学生なども含めて約50名の方から協力が得られた。協力者の背景[職種（人数）]を（表1）に示す。

表1. 健康フェスタ in せんじゅ協力者の背景

医師 (2)、薬剤師 (9)、看護師 (5)、保健師 (2)、助産師 (1)、理学療法士 (1)、作業療法士 (1)、管理栄養士 (1)、獣医師 (1)、精神保健福祉士 (1)、アロマハンドセラピスト (4)、フラスターアーティスト (4)、水引講座講師 (1)、小学校教諭 (2)、薬学部学生 (9)、看護学生 (4)、その他 (2)
--

3) 実施内容及び参加者の状況

プログラム(図2)に示すように、7号館の7204教室で「高齢者とアニマルセラピー(動物介在介入)」「薬物乱用防止(医薬品適正使用を含む)」「臨床工学士」の紹介や「アロマハンドマッサージ」「水引講座」「健康測定」「健康相談」の体験コーナーを設けた。健康測定の内容としては、血管年齢を調べる「脈波」や「骨密度」「筋肉量」「認知機能テスト」を行い、結果をもとに薬剤師、看護師、栄養士が相談に応じた。7205教室では、足立区薬剤師会とのこれまでの連携について「研究発表」³⁾や医師による「健康教育」を行った。7201教室では、認知症予防に効果があると言われている「フラワーアレンジメント」を講師の指導のもとで午前と午後それぞれ20名ずつ体験することができた。学生も、受付の補助や参加者の誘導、スタッフの昼食の準備や会場設営・片付けなど当日の運営がスムーズに運ぶように協力してくれた。当日の参加人数は62名で高齢者がほとんどであった。知り合いどうしで参加する方や単身の方もいた。「お花に癒された」「アロママッサージが気持ちよかった」「楽しかった、またやってほしい」等の感想が聞かれた。栄養相談コーナーに来られた高齢の女性は、最近夫を亡くして食事を作る気持ちにならない、一人で食べる食事はおいしくないと話されるなどひきこもりがちな生活が伺えた。病気や障害があっても高齢になっても住み慣れた地域で暮らし続けるためには、身体面だけでなく他者と交流する場づくりなど心理面や社会的側面への支援が必要である。このような場が身近にあることで日々の生活を振り返るきっかけとなったのではないかと思います。



図2. 健康フェスタ in せんじゅ プログラム

4. まとめ

未来を担う人材を育成する場である大学は、地域に開かれ地域の人々と相互に影響し合いながら発展することが重要である。短い準備期間ではあったが、生命科学、アニマルサイエンス、薬学や栄養学、看護、福祉の専門性をもつ教員や多職種とともに地域の住民を巻き込みながら超学際的な組織をつくり本事業に取り組むことができた。このような活動を展開できたのは、「持続可能な社会の発展」という理念のもとで地域貢献に取り組む本学の教育のあり方や教育や研究活動を支える人材など充実した設備や施設を備えた大学という場があったからだと考える。本事業を通して多様な背景や専門性をもつ人々と組織的に協働する意義や大学が地域連携活動を推進する必要性を再認識できた。御協力していただいた方々に心より感謝申し上げます。

本事業は、平成26年~平成29年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)『トランスディスプリナリアプローチによる看護師と薬剤師の在宅医療連携システムの構築』の助成を受けて実施した。

参考文献

- 1) 森士一: トランスディスプリナリティに関する調査研究(科学者とステークホルダーの超学際協働について) 科学コミュニティとステークホルダーの関係性を考える第二報告書(DISCUSSION PAPER No. 105-2): 2014
- 1) 小島尚: 薬剤師会と連携による薬物乱用防止教室の指導者養成のための情報提供 地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター年報 第1巻: 17-18, 2017
- 2) 定村美紀子, 糸井和佳, 佐藤亜月子: 「健康寿命を延伸させるための薬との上手な付き合い方」をテーマに実施したワールドカフェの取り組みについて: 帝京科学大学紀要 第13巻: 221-226, 2017

千住エリアにおける地域連携活動－医療福祉学科の取組み－

浅沼太郎（医療科学部 医療福祉学科）

キーワード：日常生活圏域、地域セーフティネット

1. はじめに

本報告は、2017年度に医療福祉学科で実施した「地域連携活動」の実績数をまとめ、若干の考察を行うものである。本学科では2年次の必修科目「健康福祉科学セミナーⅠ」と連続して、地域連携活動の時間を設けている。大学周辺の千住エリアを中心に活動を開始し、学生と教員で試行錯誤を重ねてきた。

地域連携活動の目的は「行政・地域団体組織・住民の協力のもと、学生と教員が足立区、とくに千住地域を中心とした生活の場（日常生活圏域）に継続的にかかわり、地域セーフティネットづくりに参画すること」¹⁾である。社会福祉専門職を目指す学生として、地域の実情に触れること、日常的な交流を通して住民の方々の要望や期待に応えることが、貴重な経験になると考えている。

本学科で取得可能な国家試験受験資格（社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士）の実習は、法制度に規定された事業所で行われる。制度化されたサービス内の対応にとどまらず、生活実態に目を向けることは、学生自身の社会をとらえる視点を養い、福祉職以外の進路等においても活かされるだろうと期待している。

2. 2017年度の主な活動内容と実績数

2017年4月～2018年3月の延べ活動回数は【112回】であった。

学生の延べ活動人数は【565人】であった。主に授業期間中、数人の小グループに分かれて、週2回活動した。

2017年度の活動拠点と主な活動内容は、次の通りである。

○公営住宅集会所における居住住民との交流、レクリエーションの実施【計24回】

団地集会所をおかりして、住民の方々との交流会を実施し、レクリエーション等を行った。

○地域包括支援センターと連携した近隣住民との交流会「千住カレッジ」等の開催【計7回】

地域包括支援センターが広報と受付窓口を担ってくださり、住民の方々との交流会「千住カレッジ」を月1回実施した。2018年2～3月には、大学本館にある調理実習室において、食事づくりを通じた交流を行った。

○住区センター、民生委員等と連携した学習会等の実施【計7回】

住区センターの夕食会やクリスマス会への参加を通じた交流のほか、民生委員と近隣の商店街への聞き取りを行い、学習成果報告会を実施した。

○高齢者グループホーム入居者との交流、外出等の活動支援【計19回】

学生が定期的に訪問し、入居されている住民と交流する他、映画鑑賞会に同行するなどの活動支援を行った。

○映画鑑賞会の実施、地域住民との交流【計17回】

近隣の住民をはじめ、高齢者グループホーム入居者が参加し、映画鑑賞を通して交流をはかった。

○精神障害者グループホーム入居者との交流、日常生活の支援【計38回】

学生が定期的に訪問し、精神障害のある入居者と交流する他、バーベキューなどイベントへの参加を行った。2018年2月には「（入居者による）大学を見てみたい」という要望に応じて、大学内での交流会を実施した。

○地域団体・機関・住民との交流イベント「カレー甲子園」の実施【2017年7月8日】²⁾

3. 今後に向けて

2017年度の地域連携活動は、本学科にとって初めての試みであった。学生が積極的に活動を展開したことによって、想定していなかった活動にもつながった。

「千住カレッジ」は2018年9月から実施しているが、地域ケア会議への参加等をきっかけに始まった。地域包括支援センターの社会福祉士による協力を得て、参加者は増加しており、交流を通して学生は地域の実態に触れた。

住区センターでは定期的な活動に結びつかず、活動内容を摸索し続けた拠点もあった。住区センターを通して、千住エリアの民生委員をご紹介いただき、商店街の聞き取りを含めて身近な地域について学習を深めた。

緒に就いたばかりの地域連携活動であり、今後取り組むべき課題も残されている。たとえば団地集会所では継続的に交流会を実施し、頻繁に参加する住民とは馴染みの関係ができた。一方で、当初考えていた「団地で困っている（公的サービスの利用がない）住民」には、まだ直接働きかけることができていない。

他にもグループホームへの訪問、映画鑑賞会等の実施など、活動の継続によって、千住エリアにおける認知も高まっていくだろう。教員間で課題と方向性を共有し、学生による地域連携活動を進めていきたい。

参考文献

- 1) 拙稿「日常生活圏域における生活課題への接近－千住地域における地域連携活動－」『地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター年報』第1巻。
- 2) 上記1) 拙稿と重複するため、内容については割愛する。

教育ボランティア活動参加学生に対する意識調査 ー足立区立東加平小学校「ワクワクウェーブ」参加学生へのアンケートを通じてー

村野芳男（教育人間科学部 学校教育学科）

キーワード：開かれた学校づくり協議会、ワクワクウェーブ、ボランティア活動、授業づくり、教職観

1. はじめに

足立区立東加平小学校（以下、東加平小）では、「ワクワクウェーブ」という活動を行っている。この活動は、学校の休業日（土曜日の午前中、年間8回）に、地域ボランティア、PTA ボランティア、学生ボランティアと東加平小教諭が連携・協力して、同校児童を学年別少人数に分けて学習指導を行うものである。

本学教育人間科学部児童教育学科学生は、平成26年度より4年間継続してこの教育ボランティア活動に参加している。本稿は、この間の同事業の概要並びに平成29年度に参加した学生への意識調査を通じて、教育ボランティア活動の有効性について考察することを目的とする。

2. ワクワクウェーブの概要

ワクワクウェーブは、「東加平小学校開かれた学校づくり協議会（会長 青木勝江氏）」が運営主体となって行っている事業で、平成14年度から継続している。活動内容は、学生ボランティアが事前に東加平小教員と指導内容や指導方法を相談したうえで、国語と算数の補充授業を行っている。授業中は、地域ボランティア、PTA ボランティアの方も教室で授業を参観し、授業の進行に応じて学習支援に加わる。また、東加平小教員も参観する。休業日の活動なので、希望する児童を学年別少人数にわけて行う。平成29年度の場合、低学年は2クラス、中・高学年は1クラスずつ開講された。人数は各クラス5名～15名程度であった。約150名の参加児童のうち、皆勤賞を得た児童が8割近くおり、充実した活動が展開されていることがわかる。

授業後に行われる反省会では、その日の授業について振り返り、教員からアドバイスを受けて次回の授業づくりに生かすようになっている。

学生ボランティアは近隣の大学（文教大学、東京成徳大学、十文字大学、未来大学、帝京科学大学等）の教員希望者が参加している。本学児童教育学科の学生が参加したのは平成26年度が最初で、以後、年々増えている（表1）

表1. 参加学生人数と学年

	2年生	3年生	4年生	合計
平成26年度			1	1
平成27年度			2	2
平成28年度	2	1	1	4
平成29年度		9	2	11

3. ボランティア学生への意識調査

平成29年度にボランティアに参加した学生11名に対してワク

クウェーブ閉室式（平成30年2月3日）終了後、以下のようなアンケートへの協力を依頼した。回答者は10名であった。

- ワクワクウェーブへの参加動機（複数回答可）
 - ボランティア活動をしたい
 - ワクワクウェーブの趣旨に賛同
 - 小学生の実態を見たい
 - 小学校の様子を知りたい
 - 授業づくりを通して実践的指導力を身に付けたい
 - 教職に対する自分の適性を知りたい
 - その他
- ワクワクウェーブへの参加回数
- ワクワクウェーブへ参加して良かったこと（二つまで選択可）
 - 授業づくりと授業実践をたくさんできた
 - 授業づくり・授業実践に創意工夫ができて充実感を覚えた
 - 児童との触れ合いができて楽しい（充実した）時間となった
 - 授業後に東加平小の先生方からご指導を受けることができ、参考になった
 - ボランティアの保護者や地域の方の助言やご指摘を受け、参考になった
 - 仲間の学生（他大学の学生も含めて）から刺激を受けた
 - 1年間やり遂げた自分に自信が持てた
 - 自らの教職観を深めることができた
 - その他
- ワクワクウェーブへの参加で、残念であったこと、思い通りできなかったこと、期待と違っていたこと（二つまで選択可）
 - 十分な回数の授業実践が出来なかった
 - 配属の学年が自分の希望と違った
 - 授業後の振り返りで、東加平小の先生方からご指導が得られなかった
 - 授業準備が十分でせず、思うような授業ができなかった
 - 児童理解が進まなかった
 - 毎回の授業準備で大変だった
 - その他
- ワクワクウェーブへの参加で、以下の点に影響がありましたか？
 - 教育実習に向かう姿勢
 - 大学での授業を受ける姿勢
 - 自らの児童観（児童理解に関する考え方や児童を観る視点・姿勢）
 - 教職に対する自らの思い
- ワクワクウェーブに参加してみて、大学と地域との連携の在り方についてどのように考えましたか。（複数回答可）

- ア. ワクワクウェーブのような活動（地域からの要請）に学生を多く送り出すべきだ
- イ. 大学はボランティア先を開拓し、学生に紹介・推奨すべきだ
- ウ. 「夢の体験教室」のような催し物をたくさんやった方がよい
- エ. 大学の施設を地域に開放すべきだ
- オ. 大学の人的資源（教員や学生）を地域にアピールし、地域に貢献すべきだ
- カ. 特別なことをする必要は感じない
- キ. わからない

4. 学生意識調査の結果と考察

1) 参加の動機

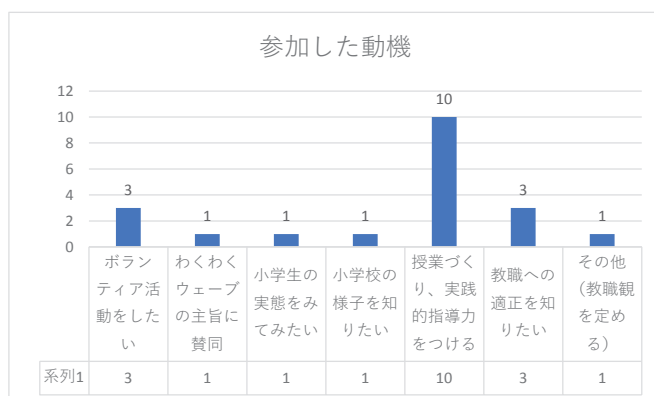


図1. ワクワクウェーブに参加した動機（複数回答可）

2) 参加回数

表2. 参加回数（全8回）

学生個人番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	平均
参加回数	6	6	5	7	7	7	5	7	6	8	6.4

3) 参加して良かったこと

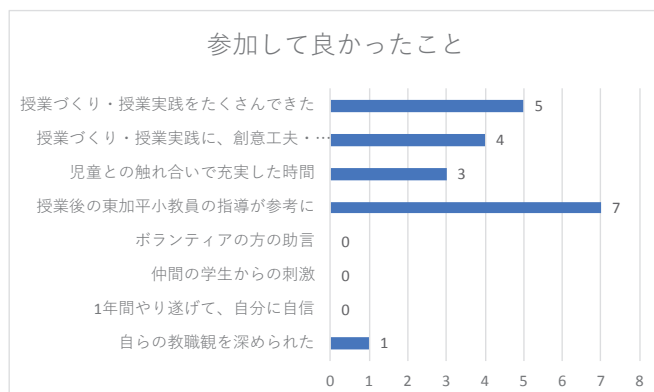


図2. ワクワクウェーブに参加してよかったこと（二つまで選択可）

4) 残念だった、思うようにいかなかった、期待外れなど



図3. 残念だったこと、思い通りできなかったこと、期待外れだったこと（二つまで選択可）

5) 考察1

学生のワクワクウェーブへの参加動機（図1）は、回答を寄せた10名全員が「授業づくりを通して実践的指導力を身に付けたい」を選択している。二つ目の選択は分散しているが、「小学校の様子や児童の実態を知りたい」、「教師への適性を見極めたい」「教職観を定める」を6名が選択している。このことから教職に就くことを目指す学生と「東加平小開かれた学校づくり協議会」の思惑が一致していることが読み取れる。年間8回のワクワクウェーブへの参加回数は平均6回である（表2）。教育実習中の欠席1を考慮に入れると半数近くの学生はほぼ毎回参加していることが読み取れ、学生の興味・関心の持続、責任感を読み取れることができ、参加学生の教職への思いの強さを感じることができる。実際、参加して良かったことを見ると（図2）、「授業後の振り返りで東加平小の先生方からご指導をいただいた」（7名）、「授業づくり・授業実践をたくさんできた」（5名）、「授業づくり・授業実践に創意工夫ができて充実した」（4名）とあるように、実際に授業ができて良かったと指摘している。一方で、残念だった、思い通りできなかった、期待と違ったなどを聞いてみた結果（図3）は、「準備が大変だった」（5名）が一番多い。また、「準備不足で思うような授業が出来ず」、授業づくりの大変さ、難しさを実感している。「児童理解が進まなかった」（2名）も含めて、大学での学びだけではわからないことの一端を、このボランティア活動で実感したと思われる。さらに、本学の学生・他大学の学生合わせて20名近くの学生が参加する事業であったため、授業回数が少なく物足りなさを感じた学生も2名おり、参加学生の期待の大きさの裏返しと読み取れる。

ワクワクウェーブで行われる授業は復習が中心であるとは言え、プリントを配って復習問題を解かせ、「マルつけ」をするだけの授業で終わるのではない。授業後半に練習問題を行う学習過程が含まれているが、東加平小の教員との事前打ち合わせを経て、学生自身が教材研究を行い、教材を作成し、導入を工夫し、学習の目当てを考えるなどの学生自身の創意工夫が求められている。授業後の先生方のご指導や地域ボランティア・PTAボランティアの方々からの感想もうかがえるなど、学生にとっては、貴重な学びの場である。何よりも児童の反応を直接感じることができることは、学生にとっては厳しいけれど「ワクワク」する授業実践の場であると言える。

6) ワクワクウェーブへの参加による自分への影響

表3. 教育実習への影響

学生番号	
1	授業に臨むのに自信が持てた。ワクワクウェーブで活かした指導、よかった指導を実習で活かそうと考えることができた。様々な自分の実践をやってみようと思うことができた。
2	授業づくりに対しての考え方が変わった。それにより、いかに児童の視点から見て考えることが大切なのか、準備が重要なのかを学んだ。
3	教育実習の時に初めての授業ではなかったもので、ワクワクウェーブをしてよかったと思った。
4	教育実習前に授業の組み立て方を学ぶことができた。模擬授業では相手が大学生でしたが、ワクワクウェーブは児童相手なので、授業の難しさとやりがいを実感することができた。
5	教育実習前にワクワクウェーブで授業づくりや子供と触れ合うことでよいスタートをきることができ、充実した実習を送ることができた。
6	指示や指導についてはすべて意図があることを知り、意図を持つようになった。
7	児童への授業への声かけや授業づくりが実習の前に経験できたため、一からではなく経験をもとに、人数が増えたらどのようにすれば良いのかなど様々なことに目を向けることができた。
8	多少の自身にはなった。
9	4月から教員になるにあたって、今の自分の力量を知り、ボランティアを通して授業の見学に積極的に参加するよう前向きになった。

表4. 大学での授業を受ける姿勢への影響

学生番号	
1	教科教育法系が楽になった。自信が持てるようになった。
2	指導案作りや模擬授業の際に、実際に児童の前で授業したことの内容や様子を思いながら考え、取り組むことができた。
3	模擬授業の時は参観する視野が広がった。
4	大学の講義で行っている内容を実践することができるので、意欲的に取り組むことができた。
7	児童のことを思い浮かべながら模擬授業の内容を考えることができ、大学の講義も今まで以上に想像しやすく、頭に入ってきたため、集中し、積極的に参加した
8	模擬授業に出る意欲が減った
9	児童を理解するために、発達障害について学ぶようになった。

表5. 児童観への影響

学生番号	
1	元々、「児童により授業が作られるべきだ」と考えていたが、その考えが強まった。児童が少ない分、一人が欠けてしまうと空気が違い、「授業は生き物だ」ということを思い知った。
2	学習における児童理解は、月に一度という頻度で学ぶことができる。どこからがつまづくポイントでみんなが苦手とするとところなのかということ、回数を重ねると自然に授業準備の際に着目し、その部分で工夫して試みようと思える。
3	児童の板書の書くスピードや理解の差を実感した。
4	児童一人ひとりの考え方を知るために、授業内で自力解決の時間を作り、机間指導を行い、支援のポイントを見極めるようにしました。
5	少人数での授業であるものの、できる子とそうでない子の差を実感するとともに、それぞれの対応の仕方を学ぶことができた。
6	自分が心を開かなければ子どもたちも開いてくれないことを知り、自ら心を開くようになった。
7	どのように児童と接することで信頼関係を築くことができるのかわかり、児童との信頼関係を築くために、授業内容を工夫することも必要だと思うようになった。
8	一人ひとりの児童によって考え方、感じ方が違う。
9	児童は「わかった、できた」と思える時が一番楽しそうに見える。そのために、的確な指示ができるように心がけるようになった。

7) 考察2

ワクワクウェーブに参加したことによる教育実習への影響を尋ねると、ほとんどの学生が肯定的な評価をしている(表3)。とくに、実習での授業づくりに参考になったと多くの学生が指摘している。ワクワクウェーブで得られたことを実習にも取り入れた(学生番号1)、児童の視点から授業づくりをすることが必要であることを学んだ(学生番号2)、大学生を相手にした模擬授業とは異なり、児童相手の授業づくりの難しさとやりがいを実習前に実感できた(学生番号4)など授業づくりの場面における肯定的な影響を述べている。また、(教員の)指示や指導には意図があるということを知り、(実習中に)意図をもつようになった(学生番号6)とあるように、教育活動は意図的、計画的に行うものであることを知識としてだけでなく実感として捉え、教育実習に臨んだことが読み取れる。

教育実習後に学生の大学での学ぶ姿勢が変わるとはよく言われることである。同じことが、ワクワクウェーブへの参加でも見られたことが表4から指摘できる。とりわけ、大学での模擬授業に対する取り組み方に表れている。ワクワクウェーブで児童の前に立てたことを思い出しながらの模擬授業に取り組んだ(学生番号2)、模擬授業参加の視野が広がった(学生番号3)、模擬授業に意欲的に取り組めた(学生番号4・8)。さらに、発達障害について学ぶようになった(学生番号9)とあるように、大学での学びが発展したとの指摘は注目に値する。

学生自身の児童観（児童理解に関する考え方や児童をみる視点や姿勢）については、多様な考えが綴られている（表5）。少人数授業なので一人でも児童が欠席したことで空気が違った（学生番号1）、児童のつまずきや苦手とするところを見届けた授業づくり・授業準備を回を重ねるごとに意識するようになった（学生番号2）。児童は一人ひとりみな違う（板書のスピード、学力差、考え方・感じ方等）ことを実感した（学生番号3・5・8）。児童の心を開くために自らが心を開くようにした（学生番号6）、児童との信頼関係を築くために授業内容を工夫する必要性を悟った（学生番号7）、児童は「わかった、できた」と思えた時が一番楽しそうに見える（学生番号9）など、児童と直接触れ合う体験をしたからこそ得られた児童観だと考える。

表6. 教職への思い

学生番号	
1	子どもたちと触れ合う中で、「楽しい、やっぱり教員になりたい」と思うことができた。子どもたちとのかけあいこそが授業だと思った。子どもたちに学ぶことが多くあった＝喜びにつながり、教員への思いが高まった。
2	授業を行う難しさを感じるとともに、児童に教える楽しさを知ることができる。どうすればよかったのか、現職の先生にアドバイスを聞き、次はこうしようと意欲が高まる。始める前よりも教師を志す気持ちが固まった気がする。
3	毎回、授業準備が難しく辛いと思った時もあったが、授業をすると楽しく毎回やりがいを感じた。
4	難しいこともあるが、それをどう改善し、乗り越える楽しさや、児童が「わかる」・「できた」ときの喜びの顔が自分も面白く、早く教職に就きたいと思っています。
5	教職を目指すか迷っていた中、実際の現場に触れることで「なりたい・目指したい」と思えるような達成感があつた。
6	とても難しい仕事だと思った。でもなりたいと思った。
7	実際に子どもたちと触れ合ったり、先生方からご指導を頂けたことで、教師になりたいと思う気持ちが強くなるとともに、未来のビジョンを鮮明に思い描くことができるようになった。
8	現場に実践に立ち教職に就きたい。
9	児童の将来を建てる大切な仕事であり、重い責任があることがわかりました。より一層なりたいと思った。
10	自分で授業の準備をして児童が理解してくれた時はすごく嬉しかった。だが、それ以外の児童理解等が出来ておらず、自分は教員に向いていないんだと思った。

ワクワクウェーブに参加したことで教職に対する意識はどのように変化したのだろうか（表6）。もともと、教職に就きたいとの思いがあった学生がボランティアに参加したのであり、その気持ちを強くしたと答えている。子どもたちに学ぶことが多い（学生番号1）、授業を行う事の難しさと楽しさを知ることができた（学生番号2・3・4）、現職の先生のアドバイス・ご指導が次への意欲につながり、教師になりたい気持ちが強くなった（学生番号2・7）、教職を目指すか迷っていたが「なりたい」と思えるような達成感があつた（学生番号5）、子どもの将来に関わる仕事・責任あることがわかり、より強くなった（学生番号9）など、教室で体験した様々な事柄が、学生の気持ちを後押ししたことが読み取れる。自分には教職は不向きと思った学生（学生番号10）も、自分の準備した授業で児童が理解してくれた時の喜びを述べており、ワクワクウェーブでの体験は、ボランティア学生一人ひとりに大きな影響を与えていることは間違いない事実である。



図4. 算数の授業（1年生）



図5. 算数の授業（3年生）



図6. 国語の授業（2年生）

8) 地域連携の在り方

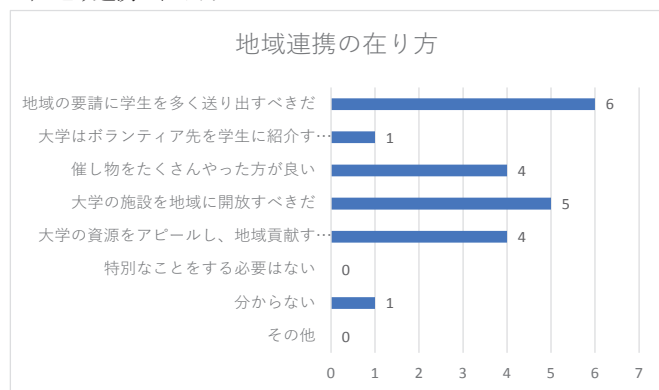


図7. 地域連携の在り方（複数選択可）

図7は、大学と地域との連携の在り方について、学生の考えを調査した結果を示したものである。図7を見ると地域との連携事業に否定的な考えは見られず、大学は地域との連携活動を推し進めるべきだとの意見をほとんどの学生が支持している。

学生のワクワクウェーブ参加の動機は、自らの実践的指導力を身に付けたい、自分の教師としての適性を見極めたいなどであった（図1）。その観点からアンケートを読み取るとそれなりの成果を上げていると学生は捉えている。そして、その成果のよりどころは、授業実践を通じた子どもたちとの触れ合いであったり、東加平小の先生方のご指導であったり、授業準備などにかけた自分自身への評価であったりする。つまりは、ワクワクウェーブでの授業実践活動に参加して良かったという事である。では、そのことと地域連携活動への肯定的な評価とはどう関係するのだろうか。「(大学は) 地域からの要請に学生を多く送り出すべきだ」(6名)は、自身がワクワクウェーブに参加して得られた充実感・達成感を他の多くの学生にも経験させて良いのではないかと考えたと推測される。しかしそれだけであろうか。ワクワクウェーブでは多くの地域ボランティア、PTAボランティアが参加して成り立つ事業である。実際、学生の授業には地域ボランティアの方が参観し、一緒になって児童への支援・指導にあたっていた。このようにして、ワクワクウェーブは成り立っていることを学生自身も十分認識していたものとする。つまりは、地域ボランティア、学生ボランティア、東加平小教員の三者が一つになって、児童のために行う活動の意義を認めた結果とも考えられる。それゆえに、「大学の施設を地域に開放すべきだ」(5名)「大学の人的資源をアピールし、地域に貢献すべきだ」(4名)「(児童教育学科が取り組み、学生自身も関わったことのある「夢の体験教室」のような) 催し物をたくさんやった方がよい」(4名)など大学と地域との連携に肯定的な意見が支持されたと考えられないだろうか。この点、今回のアンケート調査結果では検証されておらず、今後の課題となる。

5. 終わりに

本稿は「足立区立東加平小学校開かれた学校づくり協議会」が主催する「ワクワクウェーブ」に学生ボランティアとして参加した学生へのアンケート調査の結果を踏まえて、学生の教職観・授業観・児童観確立への影響等について考察し、学生ボランティアの有効性について

報告することを目的としていた。

その結果、①学生は実践的指導力や児童理解を深める目的で学習ボランティアに参加した、②授業実践や児童との触れ合いの場を得ることができ、さらには現職の先生からのご指導を受けたことで充実した時間となった、③教育実習や大学での学修にも前向きになり、④教職に就きたい気持ちが高まったなどの自己評価が見られた。そうした経験から⑤大学の地域連携活動に対しても肯定的な評価をしていることが分かった。ただ、質問紙によるアンケート調査には、絶えず質問内容の吟味が必要であり、今回の読み取りにも一定の留保が必要であることも認識しておかないといけない。また、東加平小児童や教員、地域ボランティアの方々からもご意見を伺うなどその精度を上げてゆくことも必要であり、今後の課題である。

教員養成系の学部・学科では、実践的指導力の基礎を身につける学びの場として、各教科教育法での模擬授業や教育実習がある。しかしながらこうした大学での学修には限界がある。教育ボランティアや学校インターンシップ等への参加により、実践的指導力を身につけることの必要性が言われているし、学生自身もそうした機会を求めていることが今回の調査からも言える。ただし、ボランティアへ参加しさえすれば良いというわけではない。今回の調査は、大学生の教育ボランティア活動について、多少なりともその有効性が見いだされたと考えている。

謝辞

足立区立東加平小学校のワクワクウェーブ事業へ本学学生が参加したことで、学生にとって充実した体験ができたことを感謝します。今後とも大学と「東加平小平開かれた学校づくり協議会」の協力・連携活動が続くことを切望します。また、アンケートに協力してくれた学生に感謝します。

足立区立小学校における生活科授業支援実践

二木菜月（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）・青木直樹・花園誠（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：ふれあい動物教室・生活科・実践記録・学習指導略案

1. 2017 年度の「ふれあい動物教室」の改変

2017 年、上野原キャンパスのこども学科に小学校教員養成課程が開設され、幼稚園教諭一種免許と保育士資格が取得できる「幼保コース」と、幼稚園教諭一種と小学校教員免許が取得できる「小幼コース」の

2 コース体制となった。「ふれあい動物教室」にはその実践に参加することで、児童相手のスキルが上達する仕組みがある。そこでこの機に「初等教育実践」と名付けた通年科目を新設、両コースの新入生に履修を勧めた。授業概要は以下の通り。

2006 年に教育基本法が改正され、「一成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」（第七条）と、大学の使命として社会貢献が明文化された。本学は、2001 年のアニマルサイエンス学科の創設時より地域貢献に取り組み、学士力の涵養に活用してきた。この多岐にわたる社会貢献活動の中で室・実ともに最も充実していると評価できるのが「初等教育支援」であり、今年年間 80 件程度の要請に込んでいる。具体的には、動物園の遠足支援、生活科の授業支援、校外学習支援等である。これらの支援活動に参加することの学修的意義は大きく、学生は「初等教育の実践」を体得的に学ぶことができる。正に「習うより慣れろ」を実践する科目である。本科目は、学年毎に通年設定されている。1 年次の初等教育実践演習Ⅰでは、初等教育の風土に親しみ、児童との一対一のコミュニケーションスキルを体得的に学修することを目的とする。

そして、到達目標は「1. 初等教育の風土、文化を体験し、小学校教諭としての資質を醸成する」ことおよび「2. 組織的に行動し、職務分掌

することの意味を体得的に理解する」こととし、通年 30 回の授業予定のうち、7 回を「ふれあい動物教室」の実践参加に充てた。

2. 2017 年度の概要(表 1)

表 1 は 2017 年度の概要である。全 14 回(14 校)の実施であった。

表 1. 2017 年度の概要

月	日	所※1	対象者(人)※2	運営スタッフ(人)※3	動物※4
4	22	入谷	1 年 26・2 年 19	千 4・上 38(こども 1 年 21)	ハム・モル・蚕・アオ・フト
5	13	長門	1 年 41 名・2 年 44	千 4・上 33(こども 1 年 28)・ア 2	ハム・モル・蚕・スナ・鶉
		弘道	1 年 55・2 年 49	千 5・上 33(こども 1 年 19)	ハム・ヌード・蚕・スナ
6	10	中川	2 年 85	千 5・上 33(こども 1 年 22)	ハム・モル・スナ・アオ・フト
		扇	2 年 46	千 3・上 35(こども 1 年 20)・ア 2	ハム・モル・スナ・蚕・犬
7	8	亀田	2 年 135	千 3・上 36(こども 1 年 23)・ア 2	ハム・モル・スナ・鶉・犬
		花畑	2 年 60・支援 7	千 5・上 25(こども 1 年 21)	ハム・モル・スナ・蚕・鶉
9	9	古千谷	1 年 89・2 年 102	千 9・上 47(こども 1 年 36)・ア 2	モル・スナ・蚕・アオ・フト
10	14	皿沼	1 年 39・2 年 54	千 4・上 17(こども 1 年 12)・ア 3	モル・スナ・蚕・鶉・犬
		辰沼	1 年 85・2 年 76	千 8・上 27(こども 1 年 21)	モル・スナ・鶉・犬・アオ・フト
	21	栗原	2 年 71	千 2・上 27(こども 1 年 24)・ア 3	モル・スナ・蚕・鶉・犬
11	11	関原	1 年 64・2 年 59・支援 12	千 8・上 34(こども 1 年 26)・ア 1	ハム・モル・スナ・蚕・鶉
		宮城	2 年 92	千 5・上 28(こども 1 年 19)・ア 2	モル・スナ・蚕・犬
12	9	花畑第一	1 年 66・2 年 59	千 9・上 35(こども 1 年 21)・ア 2	ハム・モル・スナ・蚕・鶉・犬

脚注※1: 全て足立区立の小学校。※2: 「1 年」は 1 年生・「2 年」は 2 年生・「支援」は特別支援学級。略号後の数字は人数。※3: 「千」は千住キャンパス・「上」は上野原キャンパス所属の学生・「ア」はアニマルシップ社員。「数字」は人数。※4: 「ハム」はハムスター・「モル」はモルモット・「ヌード」はヌードモルモット・「アオ」はアオダイショウ・「フト」はフトアゴヒゲトカゲ・「スナ」はスナネズミ。

3. 2017 年度の実践内容

2017 年度の実践から、スナネズミ・ハムスター・モルモット(心音)・イヌブースについて、指導略案の書式に合わせ録画画像から書き起こした実施内容の実例を以下に示す。スナネズミ・モルモット(心音)・

犬・蚕は6月10日の扇小学校、ハムスターは11月11日の関原小学校の実践内容である。録画画像より、いずれも時間通り順調にふれあい動物教室が進行と判断した実践の記録である。

1) スナネズミブース

時間	段階	活動内容	児童の動き・反応	指導者(班付・ハンドラー)の動き	配慮留意点
10 秒	挨拶	挨拶をする。	ブルーシートの前に一列に並んで立っている。 「よろしくお願いします。」礼。 その場に座る。	【班付】児童が一列になるのを確認し、挨拶の号令。「きをつけ、礼、よろしくお願いします。」 【ハンドラー】ブルーシートの上に対面して立っている。 「よろしくお願いします。」礼 その場に座るように指示。	児童がきれいに並べるように、班付がサポートをする。
1 分	導入	スナネズミに対する興味を引出し、スナネズミブースでのルールを確認する。	女の子1「スナネズミ！」 それぞれ大きさを表す。 女の子2「ある！」	【ハンドラー】「お姉さんの横にあるこれ(スナタワー)になにか入っているんだけど、なにかわかる？」 【ハンドラー】「正解。じゃあスナネズミはどれくらいの大きさかわかる？」両手で大きさを表すよう促す 【班付】児童達と一緒に大きさを表す。 【ハンドラー】「正解はこちらです(スナタワーにかかっているシートをはずす)。みたことある？」	端から端まで、全体に伝わるように伝える。
	約束	スナネズミブースでの約束を伝える。	ハンドラーの話を聞いている。	【ハンドラー】「今からスナネズミを観察してもらうんだけど、その前に注意事項があります。この中(スナタワー)の中には動物さんが入っているので、たたいたり揺すったり(ジェスチャーで表現)するとびっくりしてしまうのでやらないでください。」 【班付】注意がそれてしまう子に、話を聞くように促す。	やってはいけない事をしっかりと、分かりやすいように伝える。
3 分	観察	スナタワーの中にいるスナネズミの行動を観察。	班付の指示に従い二組にわかれ、スナタワーの周りに近づく。 スナタワー囲み中を覗き込む。 観察しながら、スナネズミの行動を口々に声に出して言う。 「なんか食べてる!」「のぼった!」各々見えやすい所へ移動しながら、観察を続ける。 元の位置に戻る。 一斉にその場に座る	【ハンドラー】「最後にスナネズミのクイズを出すので、よく観察しておいてください。」児童達を二つの組に分けて観察開始。 【班付】児童を二つの組に分け、スナタワーに近づくように誘導する。 【班付】児童と一緒に覗き込みながら、児童に問いかける。 「なにしてる?」「尻尾とかはどう?」 【ハンドラー】3 分後「はいじゃあ観察はここまでです。元の位置に戻ってください。」 【ハンドラー】児童がきれいに並べたのを確認した後「座っていいよ」 【班付】児童が元通りに戻れるようにサポートする。児童と一緒にその場に座る。	見るだけになってしまわないように、クイズを出すことをあらかじめ伝え、観察意欲を掻きたてる。 見つけた行動を口に出して言ってもらうことで、周りとも共有でき、全体で観察を行うことができる。

足立区立小学校における生活科授業支援実践

3 分半	学び	クイズ形式で スナネズミに ついての知識 を学ぶ	<p>誰も手を挙げない。</p> <p>全員手を挙げる。</p> <p>ハンドラーと一緒に拍手。少し 笑みが見える。</p> <p>誰も手を挙げない。</p> <p>誰も手を挙げない。</p> <p>全員手を挙げる。</p> <p>誰も手を挙げない。</p> <p>一斉に手を挙げる。</p> <p>半分ほどが手を挙げる。</p> <p>残り半分が手を挙げる。</p> <p>ハンドラーの動きをじっと見 ている。</p> <p>口々に「紙コップ！」</p> <p>首をかしげる</p>	<p>【ハンドラー】「スナネズミのことちゃんと観察できたかな？じゃあ スナネズミに関するクイズを出していきたいと思います。」「スナ ネズミさんの前足の指の数は何本でしょう。」「まず 1 番、3 本だ と思う人。」指で3を表す。</p> <p>【ハンドラー】「次 2 番、4 本だと思う人。」4を表す。</p> <p>【ハンドラー】「おお、みんな？じゃあ最後、5 本だと思う人。」5 を表す。</p> <p>【班付】手を挙げる。</p> <p>【ハンドラー】「お兄さんお姉さんだけ？」「正解は、、4 本です！」 児童に向けて拍手。</p> <p>【班付】児童と一緒に拍手。</p> <p>【ハンドラー】「じゃあ次に後ろ足の指の数は何本でしょう」「1 番 3 本だと思う人。」指で3を作る。</p> <p>【ハンドラー】「2 番 4 本だと思う人。」4を作る。</p> <p>【ハンドラー】「3 番 5 本だと思う人。」5を作る。</p> <p>【ハンドラー】「正解は5本です！みんなすごいね！」児童に向けて 拍手。</p> <p>【班付】ハンドラーと一緒に拍手。</p> <p>【ハンドラー】「次にスナネズミさんのしっぽの長さはどれくらいで しょうか。」「体より短いと思う人。」両手の人差し指で長さを作る。</p> <p>【ハンドラー】「体より長いと思う人。」先ほどより長い幅を作る</p> <p>【ハンドラー】「正解です！」児童に向けて拍手。</p> <p>【班付】ハンドラーと一緒に拍手。</p> <p>【ハンドラー】「じゃあ次に難しい問題を出します。」「スナネズミさ んはみんなと同じように夜寝て、昼に元気に動いていると思う人」 自身の片手をあげて、わかったら手を挙げるように促す。</p> <p>【班付】児童に問いかける「どうおもう？」</p> <p>【ハンドラー】「じゃあ反対に昼寝て夜動いてるよって人」手を挙げ るように促す。</p> <p>【ハンドラー】「正解は、みんなと同じ夜に寝て昼に動いています。 だから、いまこうして動き回っています。」</p> <p>【ハンドラー】後ろからスナネズミがかじった紙コップを持ってくる。</p> <p>【ハンドラー】「最後に、これは何だと思いますか？」</p> <p>【ハンドラー】「破れているのはなんでだと思う？食べてるのか な？」</p> <p>【ハンドラー】「これはスナネズミさんが玩具として、かじっている</p>	<p>集中が切れ始めて いる子や、クイズに あまり参加しない 子に対して、班付が 積極的に声をかけ、 クイズに参加する よう促す。</p>
------	----	-----------------------------------	--	---	---

				んです。あとはかじってお家を作ったりしています。」	
1 分半	確認	クイズで学んだことを、実物を見て確認する。	<p>一斉に立ち上がり、勢いよくタワーの周りに近づき、覗き込む。</p> <p>一斉に元の位置に戻る。</p> <p>「ありがとうございました。」礼。</p>	<p>【ハンドラー】「最後にまだ時間があるので、もう一度観察しましょう。」前足の数と後ろ足の数とか確認してみてください。」</p> <p>【ハンドラー】時間をみて「ここまでです。元の位置に戻ってください。」スナタワーにシートをかけ、中を隠す。児童と対面して立つ。</p> <p>【班付】児童と一緒に覗き込みながら、さっきクイズで教わったところに注目するように促す。</p> <p>【班付】児童がきれいに並べるようにサポート。児童がきれいに一列に並んだのを確認した後、挨拶の号令。「きをつけ、ありがとうございました。」礼</p> <p>【ハンドラー】「ありがとうございました。」礼。</p>	しっかりと並べ、挨拶させること。

2) ハムスターブース

時間	段階	活動内容	児童の動き	指導者(班付・ハンドラー)の動き	配慮留意点
30 秒	挨拶	児童・ハンドラー間で初めての挨拶を行う。	<p>ブルーシートの前に一列に並ぶ。</p> <p>「よろしくお願いします」礼。</p>	<p>【班付】児童を一列に並ばせる。</p> <p>【ハンドラー】児童がブルーシートの前にきれいに並べるようにサポートをする。児童と対面して立つ。</p> <p>【班付】児童がきれいに並んだのを確認し、挨拶の号令。「きをつけ、礼、よろしくお願いします。」</p> <p>【ハンドラー】「よろしくお願いします。」礼。</p> <p>【班付】児童を4班に分ける。</p> <p>【ハンドラー】班付のサポートを行いながら、児童を4班に分ける。</p>	挨拶はしっかりと行う。
1 分半	導入・約束	ハムスターへの興味を引き出す。 ハムスターブースでのルールを確認する。	<p>ロープの前に座る</p> <p>小さくうなづく。</p> <p>女の子1が手を挙げる。</p> <p>「優しく触る」</p> <p>女の子2と男の子1が小さく手を挙げる。</p> <p>「大きな声を出さない。」</p> <p>男の子1 言葉に詰まる。</p>	<p>【ハンドラー】児童に指示を出す。「ここからここまでの子は、ロープの所まで来て座ってください。」手でロープを示す。</p> <p>【ハンドラー】児童と一緒に、対面する形で座る。児童の顔を見ながら「今からハムスターさんの事について話します。(自身の名札をもって)私の名前はNと言います。よろしくお願いします。」</p> <p>【ハンドラー】「これからみんなにはハムスターに触ってもらうんだけど、その前に1番初めの3つの約束(自身の指で3を作る)覚えてる?」「なんだっけ?」</p> <p>【ハンドラー】「はいどうぞ」</p> <p>【ハンドラー】「そう。一つ目は優しく触るだったよね。」</p> <p>【ハンドラー】「はいどうぞ」女の子2をさす。</p> <p>【ハンドラー】「そう、大きな声を出さない。」</p> <p>「じゃあ、最後いえるかな?」男の子1を指す。</p>	数字など、ジェスチャーで表すことの出来る表現は、身体でも示す。

足立区立小学校における生活科授業支援実践

			<p>女の子1が手を挙げる。</p> <p>男の子1 ゆっくり「お兄さんお姉さんの話を聞く」</p> <p>数名手を挙げる。</p> <p>男の子1「噛んじゃうから」</p> <p>頷く。</p>	<p>【ハンドラー】「誰のいう事を聞くんだっけ？」男の子1に助け舟を出す。</p> <p>【ハンドラー】女の子1は指さず、男の子1が考えているのを待つ。</p> <p>【ハンドラー】「そうそう！お兄さんお姉さんの話を聞く。この3つのお約束してくれたと思うんだけど」全体に向かって「ここでは四つ目の新しいお約束があります。ハムスターさんのお口の前には絶対に指は出さないでください。なんでだと思う？」</p> <p>【ハンドラー】男の子1を指す。</p> <p>【ハンドラー】「そう、ハムスターさんはみんなより目が悪いので、口の前に何かあると餌かな？と思って確認のために噛んでしまうかもしれません。なので、お口の前には手を出さないようにしてください。」</p>	理由を伝え、悪い印象を受けないように注意する。
2分	ふれあい	ハムスターとふれあいながら、観察を行う。	<p>話を聞いている。</p> <p>男の子2 そっとハムスターに触れる。</p> <p>男の子2 手を止める。</p> <p>男の子2 頷く。</p> <p>女の子3 もそっとハムスターに触れる。</p> <p>2人ほど手を挙げる。</p> <p>女の子3 手を止める。</p> <p>女の子3 頷く。</p> <p>女の子2は3回ほどハムスターを撫でて手を止める。</p> <p>女の子2 頷く。</p> <p>その後の3人も3回ほど撫でて終了。</p>	<p>【ハンドラー】「ではハムスターを連れてきます。」立って、後ろにハムスターを取りに行く。</p> <p>【班付】待っている児童に話しかける。「楽しみだね」等。</p> <p>【ハンドラー】ハムスターを透明なかごに置いて、児童たちの前に持ってくる。</p> <p>【ハンドラー】「今日は、みんなにハムスターさんに触ってもらうんだけど、あとでクイズもやりたいと思うので、触るだけではなく、よく観察もしてください。身体の向きをかえながら「じゃあこっちのお友達から順番に触ってもらいたいと思うんだけど、触るときは頭からお尻にかけて優しく触ってください（実際に触り方を見せる）」</p> <p>【班付】順番を待っている子に声をかける。「観察してみて」</p> <p>【ハンドラー】「上手！」触り方をほめる。</p> <p>【ハンドラー】「もう大丈夫？」</p> <p>【ハンドラー】次の女の子に体を向ける。</p> <p>【班付】触り終わった子に感想を聞いている。</p> <p>【ハンドラー】女の子3が触っている間に、待っている子に対して質問する。「ハムスターさわったことある？」</p> <p>【ハンドラー】「お。いるね」</p> <p>【ハンドラー】「もういい？」</p> <p>【ハンドラー】次の子に移る。</p> <p>【ハンドラー】「もういいの？」</p> <p>【ハンドラー】次に移る。</p> <p>【ハンドラー】最後の子が終わり、身体を中央に戻す。「みんなどうだった？触ってみて」</p>	クイズをするため、しっかりと観察するように伝える。
					班付は待っている子や、触っている子の集中が途切れないう、児童に話題をふる。

			<p>口々に「気持ちよかった」「かわいかった」</p> <p>ハムスターをじっと観察する。</p> <p>その様子を見ている。</p>	<p>【ハンドラー】「じゃあ今からハムスターさんのクイズに移りたいと思うんだけど、最後良く見て、どんなお顔してるかなとか、どんなしっぽかなって。」ハムスターを児童たちの前に持っていく。</p> <p>【ハンドラー】「では、ハムスターさんをお家に返します。」ハムスターを後ろのケースに戻す。</p>	
クイズ・学び	クイズ形式で、ハムスターの知識を身につける。	<p>それぞれ頷く。</p> <p>全員手を挙げる。</p> <p>班付の事をみるが、誰も手を挙げない。</p> <p>表情を変えず、あまり反応しない。</p> <p>ハンドラーの顔をみながら頷く。</p> <p>パネルを見る。</p> <p>頷く。</p> <p>女の子2「4!」</p> <p>それぞれ頷く。</p> <p>誰も手を挙げない。</p> <p>班付の事をみるが、誰も手を挙げない。</p> <p>全員手を挙げる。</p> <p>全員手を下げる。</p> <p>表情を変えず、あまり反応しない。</p>	<p>【ハンドラー】パネルを2枚持って自身の後ろに隠す。 「みんなハムスターのお尻見た？」 「じゃあクイズを出します。」</p> <p>【ハンドラー】「ハムスターさんのお尻には尻尾がありましたか、ありませんでしたか。」児童の顔を見ながら。「ある、ないで聞いていくよ。あと思う人！（自身の片手をあげ、児童に手を挙げるよう促す）」</p> <p>【ハンドラー】「ほんとに？無いと思う人！」 【班付】手を挙げる。 【ハンドラー】「お兄さんだけ？」</p> <p>【ハンドラー】「じゃあ正解を見ていきます。」後ろからパネルを取り出す。「正解は、ちっちゃな尻尾がありました！みんなよく観察できてたね」児童にむけて軽く拍手。</p> <p>【ハンドラー】「実はハムスターはネズミの仲間です。今日ここにモルモットも来てるんだけど、モルモットもネズミの仲間です。でも、モルモットさんのお尻には尻尾があるのかな？無いのかな？ここでは言えないんだけど、ハムスターのお尻には尻尾があったというのは覚えておいてください。」</p> <p>【ハンドラー】「では、次の問題に移ります。」パネルを1枚めくる。 「実は、ハムの後ろ足の指は5本あります。（子供に見やすいようにパネルをうごかしながら）みんなの足の指も5本だよね？」</p> <p>【ハンドラー】「じゃあ前の足の指は何本でしょう。3本でいくよ？1番3本、2番4本、3番5本。かんがえて。」</p> <p>【ハンドラー】「じゃあ聞いていくよ。1番の3本だと思う人。」</p> <p>【班付】手を挙げる。</p> <p>【ハンドラー】「お兄さんは3本だと思う。じゃあ2番の4本だと思う人。」</p> <p>【ハンドラー】「みんな4本？3番の5本だと思ひと」</p> <p>【ハンドラー】「正解は（パネルを裏返す）みんな大正解、前の足の指は4本です。」</p>	選択肢を先に提示し、選んでもらう。	

足立区立小学校における生活科授業支援実践

			<p>い。</p> <p>女の子2、手をあげて喜ぶ。他の子も少し表情がにこやかに変わる。</p> <p>頷く。</p> <p>パネルの写真を見て、少し驚いた表情。</p> <p>頷く。</p> <p>一斉に立つ。</p> <p>各々手をごしごしする。</p>	<p>【ハンドラー】「前の足の指が4本で、後ろの足の指が5本、みんなとはちょっと違うね！よくハムスターの事を観察してたね。」</p> <p>【班付】児童を褒める「良く見てる！」</p> <p>【ハンドラー】「最後、(パネルをめくる)ハムスターのこれ(パネルの写真を指差す)、よく見ると思うんだけど、ほっぺふくふくだよね。」</p> <p>【ハンドラー】「これはほお袋っていっておやつがいっぱい入ります。実はここに映っているおやつが全部入ります。」</p> <p>【ハンドラー】「ハムスターはこんなに小さいのに、ほっぺにはこんなに大きな袋を持っているよってことも覚えて帰ってください。」</p> <p>【ハンドラー】「立って消毒をします。」立って、パネルを後ろに戻す。</p> <p>【班付】立った児童からウェルパスを手を吹き付ける。</p>	
30 秒	挨拶	児童、ハンドラー間で終わりの挨拶を行う。	<p>ブルーシートの前に一列に並ぶ。</p> <p>「ありがとうございました。」礼。</p>	<p>【ハンドラー】「挨拶をするので、最初の位置に戻ってください。」 「児童と対面して立つ。」</p> <p>【班付】児童がきれいに並ぶのを確認、挨拶の号令。「きをつけ、礼ありがとうございました。」</p> <p>【ハンドラー】「ありがとうございました。」礼。</p>	終わりの挨拶もしっかり行う。

3) 心音ブース

時間	段階	活動内容	児童の動き	指導者(班付・ハンドラー)の動き	配慮留意点
10 秒	挨拶	児童・実践者間で初めの挨拶を行う。	<p>ブルーシートの前に一列に並ぶ。</p> <p>「よろしくお願いします。」礼。</p> <p>ヒモの前まできて座る。</p>	<p>【ハンドラー】児童と対面して立つ</p> <p>【班付】児童がきれいに並んだのを確認、挨拶の号令。 「きをつけ、礼。よろしくお願いします。」</p> <p>【ハンドラー】「よろしくお願いします。」礼。</p> <p>【班付】児童を2つの班に分ける。</p> <p>【ハンドラー】ブルーシートの上のヒモの所まで来るように誘導。</p> <p>【ハンドラー】児童と対面して座る。</p> <p>【班付】児童の端に座る。</p> <p>【ハンドラー】自己紹介をする「(名札を児童に見せながら) Aです。よろしくお願いします。」</p>	初めの挨拶はしっかりと行う。
1 分	導入	心臓の音に対する興味をひきます。	<p>「しんぞうのおと？」</p> <p>聴診器を見る。</p>	<p>【ハンドラー】「じゃあ、これからモルモットさんの心臓の音を聞いてもらいたと思います。」</p> <p>【ハンドラー】「そう。自分の心臓の音わかる？」自身の左胸に手を当てる。</p> <p>「どきどきする音を聞くので、これを使いたと思います。」横から聴診器を出す。</p>	児童にまず自分の心臓の音を感じてもらおうと、心拍について説明しやすい。

5分	体験	<p>実際に聴診器を使い、モルモットの心臓の音を聞く。</p> <p>モルモットに注目。「ピンク！」 「かわいい」</p> <p>女の子1 聴診器を耳に当てる。</p> <p>女の子1 うなづく。</p> <p>他の子は女の子1の様子をじっと見ている。 女の子1 じっと聞いている。 他の子は口に指をあて、「しー」という動作を見せる。</p> <p>女の子1 笑顔でなづく。ほかの子も笑顔になる。</p> <p>女の子1 モルモットを指して、「こっちのが早かった。頭なんでもピンクなの？」</p> <p>男の子受け取ってすぐに聴診器を耳にあてる。 女の子1 が、ハンドラー側の聴診器を手に取り、ハンドラーに渡す。</p> <p>周りの子が男の子の顔を覗き込む。 男の子、一点をみつめ、聞くことに集中している。</p> <p>一斉に驚く「わー——」 ハンドラーの様子を笑いながら見ている。 新しいモルモットを見て「(頭の色を指し) きれい」</p> <p>男の子小さい声で「きこえた」</p>	<p>【ハンドラー】「では、端から順に聞いてもらいたと思います。」後ろからモルモットをかごに入れて持ってくる。</p> <p>【ハンドラー】 端の女の子1に聴診器の片側を渡す。 「では、これを耳にかけてください。」</p> <p>【ハンドラー】 自身ももう片方側を耳に当てる。「行きまーす、小さい音なのでよく聞いてね」</p> <p>【ハンドラー】 モルモットの心臓部分に聴診器をあてる。</p> <p>【ハンドラー】 聴診器を耳からはずし、「どう？聞こえた？」</p> <p>【ハンドラー】 聴診器を女の子1から受け取り、アルコールシートで耳の部分をつく。</p> <p>【ハンドラー】「自分の心臓の音とどっちが早かった？」</p> <p>【ハンドラー】「みんなおなじだから、これで分かるようにしてるの。」 女の子1の目をみながら。 聴診器の片側を次の男の子に渡す。</p> <p>【ハンドラー】 女の子1から聴診器の片側を受け取り、耳にあてる。 【班付】 児童と一緒に覗き込む。</p> <p>【ハンドラー】 (モルモットが「キー」となく。)モルモットを後ろに戻し、別のモルモットをかごに入れる。</p> <p>【ハンドラー】 新しいモルモットの心臓部分に聴診器をあて、男の子の反応を見る。</p> <p>【ハンドラー】 自身と男の子の聴診器をはずし、耳の部分をアルコールシートでふき、女の子2に聴診器を渡す。</p>	<p>聴診器の取り扱いについて、約束をする。</p> <p>班付は、児童が大きな声で話さないよう、注意する。</p> <p>児童の反応を見ながら、聞こえているか確認する。</p>
----	----	---	---	---

足立区立小学校における生活科授業支援実践

			<p>女の子 2 聴診器を受け取ってすぐに耳に当てる。笑顔。</p> <p>「聞こえた」女の子 2 自ら聴診器を外す。</p> <p>女の子 3、聴診器を受け取り、耳にあて、真剣に聞いている。</p> <p>女の子 3 うなずき聴診器をはずす。</p> <p>女の子たち口々に「聞こえた！」</p> <p>男の子首をかしげる。</p> <p>男の子聴診器を耳にあてる。</p> <p>男の子うなずく。「ドクドクって」</p> <p>聴診器をはずす。</p>	<p>【ハンドラー】自身も聴診器を耳にあて、モルモットの心臓部分に当てる。</p> <p>【ハンドラー】耳の部分アルコールシートで拭き、女の子 3 に聴診器を渡す。</p> <p>【班付】終わった児童と小声で会話をしている。</p> <p>【ハンドラー】女の子 3 の反応をみながら「聞こえた？」</p> <p>【ハンドラー】自身の聴診器をはずし、「みんな聞こえた？大丈夫？」</p> <p>【ハンドラー】もう一度男の子に聴診器を渡す。</p> <p>【ハンドラー】男の子に向かって「聞こえた？」</p> <p>【ハンドラー】聴診器を受け取り、横にしまう。</p> <p>【班付】児童にむかって「どうだった？」</p>	
2 分半	学び	<p>パネルを使い、心拍に対する知識を身につける。</p>	<p>身を乗り出して、パネルを見る。</p> <p>パネルを指指しながらハンドラーに質問する。</p> <p>一斉に立ち上がる。</p>	<p>【ハンドラー】パネルをとりだし、子供たちに見せる。「今聞いてもらった心臓の音を心拍数っていうんだけど」</p> <p>【班付】児童と一緒にパネルをみる。</p> <p>【ハンドラー】もう一枚パネルを取り出す。「ドクドクする回数が、動物さんによって違います。」</p> <p>【ハンドラー】児童の質問に答える。「心臓のドクドクが早いと、命の時間が短いです。」</p> <p>「じゃあ終わりにします。」いよいよ立ち上がる。</p> <p>【班付】児童と一緒に立ち上がる。</p>	<p>内容が難しいため、丁寧に、言葉を選びながら説明をする。</p>
10 秒	挨拶	<p>児童、実践者間で終わりの挨拶を行う。</p>	<p>最初の位置にきれいに並ぶ。</p> <p>「ありがとうございました。」礼。</p>	<p>【班付】児童がきれいに並んだのを確認し、挨拶の号令</p> <p>【ハンドラー】児童と対面してたつ。</p> <p>【班付】「きをつけ、ありがとうございました。」礼。</p> <p>【ハンドラー】「ありがとうございました。」礼。</p>	

– 104 –

足立区立小学校における生活科授業支援実践

			<p>数名、自分の手をパーにする。</p> <p>一斉に全員手を挙げる。</p> <p>Bと一緒に手をグーにしてパーにする。</p> <p>男の子が1人手を挙げる。</p> <p>犬が前に来ると「ワー」大きなお声をだし、身を縮める。</p> <p>女の子「ちょっと苦手」 女の子と男の子2人が立ち上がりKのいる端に移動する。</p>	<p>【ハンドラー】B 児童に向かって「今のわかった人（自身の片手をあげる）」児童に手を挙げるよう促す。</p> <p>【ハンドラー】B 児童にむかって「手をグーで（自身の手をグーにする）次は、パー（自身の手をパーにする）」</p> <p>【班付】自身の手をパーにして、児童に見せる。</p> <p>【ハンドラー】B 児童に向かって「今のわかった人（自身の片手をあげる）」児童に手を挙げるよう促す。</p> <p>【班付】児童と一緒に手を挙げる。」</p> <p>【ハンドラー】B 児童にむかって「手をグーで（自身の手をグーにする）次は、パー（自身の手をパーにする）」</p> <p>【班付】児童と一緒に手をグーにしてパーにする。</p> <p>【ハンドラー】B 立ち上がる「ワンちゃんにがてなひとー！（自身の手を挙げ、苦手な人がいたら、手を挙げるように促す。）</p> <p>【ハンドラー】B こどもにむかって「ワンちゃんもし苦手だなー来てほしくないなーって思ったら、その場でタマゴになりましょう（その場でうずくまる）。こうしていればワンちゃんがそのまま通りすぎてくれます。」</p> <p>【ハンドラー】A 犬のリードを持ったまま、Bの横を通り過ぎる。犬もBの横を通り過ぎる。</p> <p>A はBの周りを一周する。その際、児童の前も通る。</p> <p>【ハンドラー】B 立ち上がる「なので犬が近づいてきたときは、その場でゆっくりタマゴさんになってください。」</p> <p>【ハンドラー】B「これから3つの班に分かれてもらいたと思います（指で3を作り児童に向ける）」</p> <p>【ハンドラー】B「ワンちゃん苦手だったり、アレルギーあるよってこいる？」児童に問いかける。</p> <p>【ハンドラー】B「ちょっと苦手な子はこっちのKっていうワンちゃん触ってもらおうと思うので、ちょっとこっちに移動します。（手で移動するよう促す。）</p>	<p>犬が苦手な子が、大きな反応をしないように、注意する。</p>
7分	ふれあい	<p>4人ほどのグループにわかれ、犬との触れ合いを行う。</p> <p>ふれあい中に犬の飼い主が雑談を交えながら犬の知識を伝える。</p>	<p>立ち上がる。</p> <p>3組に分かれ、指示を待つ。</p> <p>立ったまま手をおわん型にしてウェルパスを吹き付けてもらったあと、乾くまでこすり合わせる。</p> <p>その場にすわる。</p>	<p>【ハンドラー】B「はいじゃあ3組に分かれてください。」</p> <p>【班付】立ち上がって、児童を3組に分ける。</p> <p>【ハンドラー】ハンドラー達も犬と一緒にスタンバイする。</p> <p>3組に分かれた児童の前に犬を1匹ずつ連れて行く。</p> <p>【ハンドラー】犬を連れていないハンドラーが、児童の手にウェルパスを吹き付ける。</p> <p>【班付】児童と一緒にウェルパスで手指を消毒する。</p> <p>【班付】児童に消毒液が乾いたか確認する。</p> <p>【ハンドラー】A「それじゃあその場に座ってください。」</p> <p>【班付】児童と一緒に座る。</p> <p>【ハンドラー】児童に犬への挨拶の仕方を確認する。「さいしょなんだっけ」</p>	

		<p>自分たちの手をグーにして前に差し出す。</p> <p>手をグーにしたまま待っている。</p> <p>にこにこしながら、犬の事を見ている。</p> <p>笑顔で犬に触れる。</p> <p>犬とハンドラーを見ながらずっとなでている。</p> <p>首をかしげる 女の子「50 歳くらい」</p> <p>「えええええ——」驚き顔を見合わせる。その間も犬に触っている。</p> <p>ハンドラーと話しながらずっと犬に触れている。</p>	<p>【班付】児童と一緒に自身の手をグーにする。</p> <p>【ハンドラー】「グー！そうですね！じゃあ挨拶しに行きます。待っててください。」</p> <p>犬を児童の方へ誘導する。</p> <p>犬が児童の手を順番に嗅ぐように誘導する。</p> <p>【ハンドラー】犬が全員の手を嗅いだことを確認して、「はい、挨拶できました！そしたらパーにして優しく触ってあげてください。」</p> <p>【班付】児童と一緒に犬をなでる。</p> <p>【ハンドラー】犬のリードをしっかりともち、児童を見ている。</p> <p>犬の紹介をしていく「この子はゴールデンレトリバーという種類の C 君です。」</p> <p>【ハンドラー】「何歳くらいだと思う？」</p> <p>【ハンドラー】「50 歳くらい！？この子は5 歳です。」</p> <p>【ハンドラー】児童に向けて質問をする「他に犬触ったことある？」等ふれあいをしながらコミュニケーションに努める。</p>	<p>班付も積極的に触りながら、児童に示す。</p>
30 秒	挨拶	<p>児童、実践者間で終わりの挨拶を行う。</p> <p>手を止めて、立ち上がる。</p> <p>各々手をごしごしする。</p> <p>最初の位置にきれいに並ぶ。</p> <p>「ありがとうございました。」礼。</p>	<p>「そろそろ終わりにします。」いっいながら立ち上がる。</p> <p>【班付】児童と一緒に立ち上がる。</p> <p>【ハンドラー】「立って消毒をします。」</p> <p>【班付】立った児童からウェルバスの手にかける。</p> <p>【班付】児童がきれいに並んだのを確認し、挨拶の号令</p> <p>【ハンドラー】児童と対面してたつ。</p> <p>【班付】「きをつけ、ありがとうございました。」礼。</p> <p>【ハンドラー】「ありがとうございました。」礼。</p>	

5) 蚤ブース

時間	段階	活動内容	児童の動き	指導者(班付・ハンドラー)の動き	配慮留意点
10 秒	挨拶	<p>児童、実践者間で初めの挨拶を行う。</p> <p>「よろしくお願いします。」礼。</p>	<p>ブルーシートの前に一列に並び、きをつけをする。</p> <p>「よろしくお願いします。」礼。</p>	<p>【班付】児童がきれいに並んだのを確認し、挨拶の号令。</p> <p>【班付】「お兄さんお姉さんによろしくお願ひしますをしましょう。よろしくお願ひします。」礼。</p> <p>【ハンドラー】「よろしくお願ひします」礼。</p> <p>【ハンドラー】児童の方へ近づき、「じゃあここからここのお友達、僕</p>	<p>挨拶中は、しっかり並び、大きな声で行う。</p>

足立区立小学校における生活科授業支援実践

				のところまで来てください。」2班に分ける。	
1分半	導入 ・ 約束	カイコに対しての興味はじきだし、カイコブースでの約束を確認する。	<p>ハンドラーの誘導で半分に分かれて、それぞれのハンドラーの前に近づいていく。 一斉にロープの前に座る。</p> <p>ロープのぎりぎりまで近づいていく。</p> <p>ハンドラーの顔を見ている。 「よろしくお願いします」</p> <p>首をかしげる。</p> <p>お互い顔を見合わせながら、考えている様子。「おぼえてない」</p> <p>女の子「かいこ」</p> <p>箱の中を覗き込む。 笑顔。「かわいい」</p> <p>一斉に手をお椀型にして、ハンドラーの方に手を出す。</p> <p>ハンドラーの真似をして、自分たちの手をこすり合わせる。</p> <p>各々手のひらをハンドラーに向ける。</p>	<p>【ハンドラー】座りながら、「それでは、このロープの前に座ってください。」ロープの場所を手で示す。</p> <p>【ハンドラー】「もうちょっと近くにおいで」ロープの近くまで来るように手招きする。</p> <p>【班付】児童の後ろ、あるいは端にすわる。</p> <p>【ハンドラー】自己紹介を行う。「このブースを担当します、Mです（名札を児童に見えやすい高さまでもっていく）。よろしくお願いします。」</p> <p>【ハンドラー】横にある箱を手に取りながら、「今日紹介するのは、この箱の中にはいるものなんですけど、（箱を児童に見せる）なんだと思う？」</p> <p>【班付】児童に問いかける「なんだと思う？」</p> <p>【ハンドラー】「为什么呢か？」 自身の片手をあげて、分かったら手を挙げるように促す。</p> <p>【班付】「わかる？ さっきお姉さんがいったものだよ。」</p> <p>【班付】笑いながら「おぼえてない？」</p> <p>【ハンドラー】箱を指さしながら「ここにはいるものだよ」</p> <p>【ハンドラー】「おおー」【班付】「おおー」</p> <p>【ハンドラー】箱のふたを開けながら、「蚕さんが中にいます。」箱の中を児童に見せていく。</p> <p>【ハンドラー】「今日はこの蚕さんをみんなに触ってもらおうと思います。」</p> <p>【班付】「触れる？ どう？」</p> <p>【ハンドラー】いったん箱を横におき、ウェルパスを持つ。「みんなに消毒をしてもらいます。」いったんウェルパスを横に置き、自身の手をお椀型にする。「みんな手をお椀型にして」</p> <p>【ハンドラー】端から順に児童の手のウェルパスをかけていく。 「そしてよく乾かして」自身の手をこすり合わせる。 「で、乾いたらみせて」自身の手のひらを児童に向ける。</p> <p>【ハンドラー】「かわいた？」</p> <p>【ハンドラー】蚕のはいった箱を持ちながら「これから、触ってもらうんですけど、その前に最初の3つのお約束覚えてるかな？」</p>	<p>虫が苦手な子も多いため、いきなり見せてびっくりさせないように、あらかじめ、何に触るかを児童に伝える。</p> <p>数字などは、なるべく手やジ</p>

			<p>少し笑いながら首を傾げ考えている。</p> <p>女の子「大きな声を出さない」</p> <p>男の子控えめに手を挙げながら「優しく触る」</p> <p>考える</p> <p>興味は箱の中についている。</p>	<p>「一つ目は？」</p> <p>【班付】「一つ目は？」児童に問いかける。</p> <p>【ハンドラー】「そう、大きな声をださない。」</p> <p>【ハンドラー】「二つ目は？」</p> <p>【ハンドラー】「そう優しく触る」【班付】「そうそう」</p> <p>「3つ目は？」</p> <p>【ハンドラー】自分をさしながら「お兄さんお姉さんのいうことを聞きます。」【班付】頷く。</p>	<p>エスチャーでも表現する。</p>
2分	ふれあい・観察	<p>実際にカイコに触り、どういう生き物かを、体感し観察する。</p> <p>カイコがそばにくると小さく身を引く。</p> <p>恐る恐る指の先で蚕に触れる。</p> <p>触った子は笑顔になる。</p> <p>順番に指先だけで蚕に触れ始める。</p> <p>男の子うなづく</p> <p>順番にカイコの先の方を指でさす。</p> <p>各々うなづく。</p> <p>カイコに顔を近づけ、うなづく。</p> <p>カイコの顔をみる。</p> <p>一斉に身を引いて「えー」「やだー」</p> <p>女の子カイコから逃げるように、体を後ろにずらす。</p>	<p>【ハンドラー】「じゃあみんなに触ってもらいたと思います」カイコを箱から取り出す。「触りたい人！」児童に手をあげるように促す。</p> <p>【ハンドラー】カイコを1匹手のひらに乗せて、端から児童に近づけていく。</p> <p>「触ってごらん」児童に触るよう促す。</p> <p>【ハンドラー】「やわらかいでしょ」</p> <p>【ハンドラー】順に児童に蚕を近づけながら「ふわふわしてるでしょ」</p> <p>【ハンドラー】全体に向かって「かいこさんのお顔ってどこにあると思う？」</p> <p>【ハンドラー】「ここ？この黒いところ？」カイコの先の方を指さしながら児童に確認。</p> <p>【ハンドラー】「実はカイコさんのお顔はこの茶色い小さいところわかる？」もう一度カイコを児童に近づける。</p> <p>カイコの先端をゆびさしながら「ここなんだよ」</p> <p>【ハンドラー】「カイコさん持ってもらおうと思うんだけど。」</p> <p>【ハンドラー】「大丈夫、大丈夫だよ」と言いながら児童にカイコを近づける。</p> <p>【班付】「手の上のにのせるのは？」自身の手をお椀型にする。</p>	<p>班付やハンドラーが、積極的にさわり、児童に示すことが重要。</p> <p>肯定的な印象を与える表現に努める。</p> <p>触れない子にカイコを近づける際は、児童を良く観察しながら。</p> <p>カイコの習性</p>	

足立区立小学校における生活科授業支援実践

			<p>繭を一斉に見る。</p> <p>「もってる」「家にある」</p>	<p>【ハンドラー】横から繭を取り出しながら「カイコさんはね、糸をはくんだけど、この子が作った糸でできた繭です。」繭を児童に見せる。</p> <p>「この中で大きくなって蛾になるんだよ。」</p> <p>「細い糸見える？」カイコの乗った手で繭を持ちながら児童に近づける。</p> <p>【ハンドラー】「この糸はお父さんとかがネクタイに使ってるんです。」</p>	<p>や、人との関わりを伝える事により、カイコを身近に感じ、さわれるようになることも多い。</p>
4分	クイズ・学び	クイズ形式でカイコに対する知識を身に着けていく。	<p>繭に顔をよせ、細い糸を見る。</p> <p>体を少しずつもどしながら。体を後ろにずらしていた子も完全にもとの位置に戻る。</p> <p>顔を見合わせながら考えている。</p> <p>「100」「50」「70」</p> <p>「20」「10」「5」</p> <p>あまりピンと来ていない表情。</p> <p>カイコを一斉に見る。</p> <p>女の子「12日間？」</p> <p>手をお椀型にする。</p> <p>自分たちの手をごしごしする。</p> <p>ハンドラーに手のひらを向ける。</p> <p>一斉にたつ。</p>	<p>繭をみせながら（カイコはまだ手に乗っている）、「この細い糸を1本に伸ばすとどのくらい長いでしょうか」</p> <p>【ハンドラー】「どのくらいだと思う？東京タワーわかる？東京タワー何個分だと思う？」</p> <p>【班付】「何個分だと思う？わかる？」児童に発言するように促す。</p> <p>【ハンドラー】「もうちょっとすくないな」</p> <p>【班付】「もうちょっとすくないって」</p> <p>【ハンドラー】「5個分くらい、そのくらいの長さになります」</p> <p>【ハンドラー】カイコをみせながら、「この子が東京タワー5個分の糸を出すんだよ。すごくない？」</p> <p>【ハンドラー】「では、もう一つクイズだします。カイコは大人になると蛾になるんだけど、その蛾はいったい何日生きられるでしょう」</p> <p>【ハンドラー】「せいまい！すごいね！」【班付】「すごいね！」</p> <p>【ハンドラー】「ではそろそろじかんなので」カイコを箱に戻す。消毒をします。</p> <p>【ハンドラー】端から順にウェルパスをかけていく。</p> <p>【班付】「ごしごししてね」自身の手をこすりあわせながら。</p> <p>【ハンドラー】「乾いた？みせて」自身の手のひらを児童の方にむけ、児童にも手のひらを見せるよう促す。</p> <p>【ハンドラー】全員の手のひらが乾いたことを確認し、「じゃあたつてください」と立つように促しながら、じぶんも児童と対面して立つ。</p>	<p>クイズ形式にすることで、楽しく知識をつけることができる。</p> <p>班付が積極的にクイズに参加することにより、場が盛り上がり、児童も発言しやすくなる。</p>
10秒	挨拶	児童、実践者間で終わりの挨拶を行う。	<p>「ありがとうございました。」礼。</p>	<p>【班付】「お兄さんの方を向いてください。」</p> <p>こどもがきれいに並んだのを確認し、挨拶の号令。</p> <p>【班付】「教えてくださったお兄さんお姉さんに挨拶をします。きをつけ、ありがとうございました」礼。</p> <p>【ハンドラー】「ありがとうございました。」</p>	<p>最後の挨拶もしっかりと行い、メリハリをつける。</p>

NHK 環境キャンペーンイベントへの出展を通じた社会貢献活動の報告 2017

榊原健太郎（総合教育センター）・堀米陽太・花園誠（教育人間科学部 こども学科）

藤咲舞（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

動物介在教育研究部・ドッグトレーナー研究部

キーワード：社会貢献活動、いのちと環境、ライフスタイル、多世代交流、継続性のある活動、社会的還元

1. はじめに

本学の地域連携推進センターでは、2017 年度の活動の一つとして、NHK 主催イベント「渋谷 DE どーも 2017」への出展を通じた社会貢献活動を実施した。本報告では、本活動の概要や出展内容などについて報告する。

2. 活動の概要

2-1. 活動の期日

本学の地域連携推進センターの社会貢献プロジェクト（社会貢献関連分野）では、2017 年 5 月 3 日（水・祝）・4 日（木・祝）・5 日（金・祝）に東京・渋谷の NHK 放送センターで開催された NHK 主催イベント「渋谷 DE どーも 2017」における「体験！エコゾーン」と称する出展エリア（正面玄関前広場）にて、「帝京科学大学 動物ふれあい教室」を出展した。本学は、この期間のうち、5 月 3 日及び同 4 日に出席した。出展時間は両日ともに 10:00 開始、17:00 終了であった。

2-2. イベントの概要など

「渋谷 DE どーも 2017」は、NHK 主催による一般来場者向けの参加型イベントである。（なお、「渋谷 DE どーも」の初回開催は 2005 年である。）

このイベントは、子どもから大人まで多世代で楽しめる公共放送のテーマパークイベントとして構成されているが、NHK の人気番組等の各種特設ショーをはじめ、環境キャンペーンの一環として環境について学べるワークショップ（「体験！エコゾーン」）の展開などにも特徴がある。例年、イベント開催日には、NHK 総合テレビにて、イベントの様子やコンテンツの魅力などを伝える生中継番組が放映されている。（参考：図 1）

2-3. 活動の主体

2017 年度の本活動の主体は千住・上野原両キャンパスの動物介在教育研究部及びドッグトレーナー研究部の部員たちを中心とする学生たち（31 名）であった。なお、出展内容の一部については、関係する卒業生（社会人）（2 名）による協力や助言を得ることができた。

3. 活動の経緯

本学の同イベント「体験！エコゾーン」エリアへの出展は、(NHK 環境キャンペーンイベント「ECO パーク」への同趣旨の出展を含め) 今回で 6 回目を数える。前報においても触れた通り、本センターにおける継続性のある活動の一つとなっている。

同エリアの趣旨やその展開は、私たちが広く生活の中での「環境やいのち」との関わりについてのヒントや気づきを得ること、また（特に東日本大震災以降において）「ライフスタイル」を見直すきっかけ

くりなどを大切にするなどであるが、これは本センター並びに参画学生一同にとっても、特に日頃の教育・研究、あるいは学修や地域活動等のあり方やスタイルを見直しつつ、一般来場者へ向けてそうした大学の活動内容や知的資源の一部を社会的に還元する貴重な機会となってきた。



図 1. イベント会場の風景

4. 出展内容の概要

4-1. 出展コンセプト

本出展では、前年度に引き続き出展コンセプトに「「どうぶつ」のいのちに触れ、いのちやそれを取りまく環境の大切さをたのしみながら学びませんか」を定め、同イベントの公式案内にこれを示した。

あわせて、私たちが身の回りのいのち（生きものたち）とが取り結ぶ関係（環境）や人間のライフスタイルなどを見つめ直すきっかけとなる出会いの場を分かち合ひましょう、とのメッセージをこれに添えた。

4-2. 出展プログラム

出展プログラムは、動物たちとのふれあい（モルモット、ハムスター、カイコ、ドッグほか）、ドッグショー（以上、5 月 3 日実施）、クラフト（どうぶつ塗り絵、繭クラフト、どうぶつお面づくりなど）（以上 5 月 4 日実施）、及びいのち・環境・教育といったコンセプトに関わる、帝京科学大学の教育・研究・地域連携活動の一般来場者向けの紹介や活動照会対応（以上、両日実施）などであった。

出展のタイムテーブルについては、10:00 開始、17:00 終了のイベント開催時間において、両日とも、基本的に 30 分ごとに出展内容を展開する形式（ハムスター⇒モルモット⇒大学紹介等⇒カイコ⇒ドッグ（5 月 3 日）、繭クラフト⇒どうぶつ塗り絵⇒大学紹介等⇒どうぶつお面づくり（5 月 4 日））にて実施した。

4-3. 出展の企画・運営

出展に関わる企画・運営・管理などについては、出展各期日のタイムテーブルや学生スタッフの担当シフト等の作成を含めて、参画した本学学生スタッフにおいて全て分担した。特に、現場における時間管理や（主催者サイドとの連絡・報告を含む）状況判断、ミーティングの設定・実施、学生スタッフへの指示出しなど含むマネジメントについては、企画の責任者である学生2名が担当した。なお、教員が従事した役割は、出展全体の責任・監修及び出展現場の安全管理などが主なものであった。

以下の図（図2 - 図7）は本出展の様子的一端を示したものである。また、大学のWebサイトには（過年度の報告と合せて）活動報告や写真が掲載されている。ご参考頂ければ幸いである。



図4. ドッグショーの一コマ



図2. ミーティングの風景



図5. モルモット、カイコ等の動物ふれあいの様子



図3. 一般来場者向けに帝京科学大学を紹介する参画学生



図6. どうぶつクラフトの風景



図 7. 来場した子どもたちへの声かけや交流の様子

5. 出展を終えて

5-1. イベントの成果等の側面から

主催者発表によると、イベント全体への来場者は3日間で6万9千人超を数え、(本学が出展した)3日・4日の来場者に限っても4万4千人を超えた。このような来場者数については、一般来場者の方々の本イベントへの関心や有効な宣伝による効果はもちろんのこと、主催者の優れた運営力などの条件なくして成立しないものである。来場者の中には、本学のWebサイトでの本出展の告知や過年度の活動記録を閲覧して来場された方々もいた。結果として本学は、一般来場者に対して本学をアピールする貴重な機会を得ていることは確かであろう。(なお、来場者から主催者へ回答されたイベントや個別出展についてのアンケート結果等については、帰属に関する点などを考慮して本報告では直截には取扱わない。)

5-2. 参画学生から見た成果と課題の側面から

参画した学生が示した成果と課題について、その概要を以下に示す(括弧内は、学年と所属キャンパス)。

【成果／良かった点】

- (1) 部活動の一つとして NHK のイベントでの社会貢献活動があることわかり、部活動の多彩な活動を理解することにつながった。(1年・千住)
- (2) 他の出活動にたずさわっているひとたちと、活動を通して互いの活動について情報交換できたり、雑談できたりしたことが、たのしく感じられた。(2年・千住)
- (3) NHK 職員の方たちが、きびきびと指示している姿をみて、スタッフの一人として学ぶことがあった。(3年・上野原)
- (4) 千住と上野原のそれぞれのキャンパスの部員が社会貢献という共通のテーマで活動できることに意義があると感じた。(4年・上野原)

【課題／改善する余地がある点】

- (1) 先輩や卒業生の方々に甘えてしまって面があったかもしれない。反省したい。(1年・千住)
- (2) 動物の退避スペース(涼しい場所)を確保したい。(3年・千住)

(3) 大学について質問されたときに、うまく答えられないときがあった。大学の基本情報について、多面的に情報を理解しておかなければならないだろう。(3年・上野原)

(4) この活動には、大学の他の部活などの参加も可能な面があるのではないかと感じた。出展コンテンツを多彩にすることにもつながるとおもう。(4年・上野原)

6. 活動の総括

6-1. 出展の企画・運営の観点からの評価

「渋谷 DE どーも」における「体験！エコゾーン」への出展については、一般来場者向けの出展として、企画・運営面における精度や練度がより高まっていることが窺える。ここには、過去6回(6ヵ年)における同出展の成果と改善点についての継承と発展を見て取ることができる。例えば、主催者のコンセプトと本出展のそれとのあいだにある「環境やいのち」や「ライフスタイル」などを通じた調和や共鳴関係の形成、あるいは、現役の参画学生と本学の卒業生(社会人)とのあいだに生じた世代をこえる協力関係、出展現場での一般来場者の誘導手順の安定化などは、その一展開であるとしてよいだろう。

他方、課題も散見する。一般来場者からの大学についての質問にうまく答えられないときがあったという点である。大学の基本情報を多角的に理解するための、事前レクチャーなどを実施するなどの対策を講じる必要があるだろう。上掲の「【課題／改善する余地がある点】」の「(3)」が、この課題の所在を指摘していたと思う。特に、参加学生のメンバー構成が毎年変化する活動である点から見ても、毎年丁寧に、また確実に実施する必要があるだろう。

6-2. 所属キャンパス・学科を超えた学生間交流の観点からの評価

前報においても触れた点であるが、学生間の交流の観点から本活動の評価することができる。例えば、同じく上掲の「【成果／良かった点】」の「(4)」がこの点を指摘している。他方で、更なる改善案として、上掲の「【課題／改善する余地がある点】」の「(4)」も傾聴に値するだろう。部活動同士の交流や所属キャンパス・学科・学年という枠をこえた、学生間の関係づくりに資する活動として本活動をさらに展開させることも可能ではないだろうか。他方、本活動を通じた社会的経験がキャリア形成の資源としてもつ価値についても指摘したい。

いずれにせよ、本活動はこのような総括や報告をふまえ、引き続きより優れた水準の社会貢献プログラムや活動を通して、本学の知的資源を社会的に還元できるよう、また本活動の主体である学生たちにとってより魅力的な社会活動資源となるように努めてゆくことが求められていると考える。

謝辞

イベント主催者である NHK の関係者の皆様、本活動の推進にご協力・ご助言くださった皆様へ、この場をお借りして御礼申し上げます。

廃校を活用した環境教育支援実践の2017年度の成果

花園誠・青木直樹（教育人間科学部 こども学科）・榊原健太郎（総合教育センター）

キーワード：環境教育、足立区教育委員会連携事業、廃校

1. はじめに

足立区教育委員会と提携して足立区立小学校の4年生を対象とした環境教育支援事業(通称「大学遠足」)が始まったのは2010年(平成22年)からである。2017年度は全5回実施し、5校を受け入れた(表1)。

表1. 2017年度の受け入れ校

回	月日(曜日)	小学校名	児童数
1	9月17日(木)	平野小学校	65名
2	9月18日(金)	千寿常東小学校	87名
3	9月11日(月)	中島根小学校	75名
4	9月14日(木)	宮城小学校	64名
5	11月9日(木)	千寿小学校	86名

2. ねらい

- 1)秋の里山を散策し、自然と人間との関わりを学ぶ。
- 2)体験活動を通じて大学生や社会人との交流を楽しむ。

3. 活動の概要

- 1)往路(現地到着まで):「めざせ上野原。冒険地図」

中央高速に乗り、上野原インターを降りるまでの車窓から見つけられるランドマークを示す地図を各自に配布。そのランドマークから現在位置を知る。ガイドブック裏表紙の地図を活用。

- 2)現地:「指示(ミッション)に従った体験活動」

自然観察(体験)のための散策エリアを限定した『探検!発見!ガイドブック』を使って、大学生と一緒にウォークラリー形式で実施。状況に応じ、以下の3パターンからどれかを実施。

- ①晴天等でコンディションが良く、川に降りられる場合(晴天プラン)
- ②小雨等で川は利用できない場合(小雨プラン)
- ③豪雨等で野外は利用できない場合(豪雨プラン)

4. 活動プランの詳細

- 1)活動の基本的な考え

体験活動の場所は、「山」・「川」・「廃校舎」・「体育館」の4カ所。ベストの体験活動になるように、状況に応じて利用する場所を取捨選択する。

- 2)晴天プラン

1～6班「山」(体験学習)→「川」(昼食)→「廃校舎」(体験学習)

7～12班「廃校舎」(体験学習)→「川」(昼食)→「山」(体験学習)

- 3)小雨プラン

1～6班「山」(体験学習)→「体育館」(昼食)→「廃校舎」(体験

学習)

7～12班「廃校舎」(体験学習)→「体育館」(昼食)→「山」(体験学習)
※体育館で昼食の場合、移動に時間がかからないので昼食の時間配分を少なくし、その分「山」・「廃校舎」の体験学習に時間を多く配分する。

- 4)豪雨プラン

1～6班「体育館」(体験学習)→「体育館」(昼食)→「廃校舎」(体験学習)

7～12班「廃校舎」(体験学習)→「体育館」(昼食)→「体育館」(体験学習)

※体育館で昼食の場合、移動に時間がかからないので昼食の時間配分を少なくし、その分「山」・「廃校舎」の体験学習に時間を多く配分する。

5. 活動内容の記録について

班付きの学生はデジタルカメラを携行、生徒の求めに応じて、「人物・風景・動植物」等を撮影する。データ(SDカード)は、帰路につく直前にお渡しします。まとめ学習等にご活用して下さい。

6. タイムスケジュール

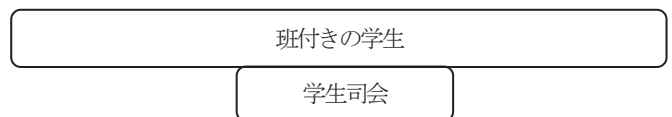
- (1)遠足当日

- ①到着から始めの会

9:40 バス到着

10:00 はじめの会(体育館で実施。)

班ごとに整列。引率の学生を紹介。(以下の図を参照)



1・2・3・4・5・6班・・・7・8・9・10・11・12班

※5.班ごとに生徒の名簿を事前にください。

※6.以下のどれかにあてはまる生徒がいる時は、名簿にその旨を記載してください。

- 1)動物や植物に対するアレルギーのある生徒。
- 2)けがなどで足が悪い生徒。
- 3)その他、特別な支援が必要な生徒。
- 4)写真撮影不可の生徒。(活動記録・報告用に活動中の写真を撮る。)

②「晴天プラン」の体験学習

1・2・3・4・5・6班のタイムテーブル

時間	内容
10:10～11:00	活動1「山」(体験学習)。各班に分かれて行動。 6班(小学生は7or8人)に分かれる。各班につき学生3名が引率。 各班がミッションに従って体験活動を開始。学生の案内に従う。
11:15～12:15	昼食「川」班ごとにまとまって昼食。
12:30～13:20	活動2「廃校舎」(体験学習)。各班に分かれて行動。 6班(小学生は7or8人)に分かれる。各班につき学生3名が引率。 各班が学生の引率に従い校舎内で体験学習。
13:30～13:40	帰り支度・トイレ
13:40～13:45	終わりの会(体育館で実施)
13:45～13:50	写真撮影
13:50～	バスに乗車
14:00	出発

7・8・9・10・11・12班のタイムテーブル

時間	内容
10:10～11:15	活動1「廃校舎」(体験学習)。各班に分かれて行動。 6班(小学生は7or8人)に分かれる。各班につき学生3名が引率。 各班が学生の引率に従い校舎内で体験学習。
11:25～12:05	昼食「体育館」班ごとにまとまって昼食。
12:15～13:20	活動2「山」(体験学習)。各班に分かれて行動。 6班(小学生は7or8人)に分かれる。各班につき学生3名が引率。 各班がミッションに従って体験活動を開始。学生の案内に従う。
13:30～13:40	帰り支度・トイレ
13:40～13:45	終わりの会(体育館で実施)
13:45～13:50	写真撮影
13:50～	バスに乗車
14:00	出発

7・8・9・10・11・12班のタイムテーブル

時間	内容
10:10～11:00	活動1「廃校舎」(体験学習)。各班に分かれて行動。 6班(小学生は7or8人)に分かれる。各班につき学生3名が引率。 各班が学生の引率に従い校舎内で体験学習。
11:15～12:15	昼食「川」班ごとにまとまって昼食。
12:30～13:20	活動2「山」(体験学習)。各班に分かれて行動。 6班(小学生は7or8人)に分かれる。各班につき学生3名が引率。 各班がミッションに従って体験活動を開始。学生の案内に従う。
13:30～13:40	帰り支度・トイレ
13:40～13:45	終わりの会(体育館で実施)
13:45～13:50	写真撮影
13:50～	バスに乗車
14:00	出発

④「豪雨プラン」の体験学習

1・2・3・4・5・6班のタイムテーブル

時間	内容
10:10～11:15	活動1「体育館」(体験学習)。各班に分かれて行動。 6班(小学生は7or8人)に分かれる。各班につき学生3名が引率。 各班が学生の案内に従い体育館内で体験学習。
11:25～12:05	昼食「体育館」班ごとにまとまって昼食。
12:15～13:20	活動2「廃校舎」(体験学習)。各班に分かれて行動。 6班(小学生は7or8人)に分かれる。各班につき学生3名が引率。 各班が学生の引率に従い校舎内で体験学習。
13:30～13:40	帰り支度・トイレ
13:40～13:45	終わりの会(体育館で実施)
13:45～13:50	写真撮影
13:50～	バスに乗車
14:00	出発

③「小雨プラン」の体験学習

1・2・3・4・5・6班のタイムテーブル

時間	内容
10:10～11:15	活動1「山」(体験学習)。各班に分かれて行動。 6班(小学生は7or8人)に分かれる。各班につき学生3名が引率。 各班がミッションに従って体験活動を開始。学生の案内に従う。
11:25～12:05	昼食「体育館」班ごとにまとまって昼食。
12:15～13:20	活動2「廃校舎」(体験学習)。各班に分かれて行動。 6班(小学生は7or8人)に分かれる。各班につき学生3名が引率。 各班が学生の引率に従い校舎内で体験学習。
13:30～13:40	帰り支度・トイレ
13:40～13:45	終わりの会(体育館で実施)
13:45～13:50	写真撮影
13:50～	バスに乗車
14:00	出発

7・8・9・10・11・12班のタイムテーブル

時間	内容
10:10～11:15	活動1「廃校舎」(体験学習)。各班に分かれて行動。 6班(小学生は7or8人)に分かれる。各班につき学生3名が引率。 各班が学生の引率に従い校舎内で体験学習。
11:25～12:05	昼食「体育館」班ごとにまとまって昼食。
12:15～13:20	活動2「体育館」(体験学習)。各班に分かれて行動。 6班(小学生は7or8人)に分かれる。各班につき学生3名が引率。 各班が学生の案内に従い体育館内で体験学習。
13:30～13:40	帰り支度・トイレ
13:40～13:45	終わりの会(体育館で実施)
13:45～13:50	写真撮影
13:50～	バスに乗車
14:00	出発

※7.遠足の標準装備をご指導ください。

1)各自の持ち物

①すいとう

②体験バック

③リュックサック

中身は、おべんとう・タオル・ティッシュ・雨合羽(集団の自然散策で傘は危険。)レジャーシート(ビニールシート。広げた上でお弁当をいただく)など。

リュックサックは、はじめの会終了後、班ごとにひとまとめにして、一時預かり。昼食前後の活動時は、「すいとう・体験バック」をもって行動。

自然を楽しむ心

※8.活動時の服装：野外体験活動は「肌の露出を避ける」が基本。

①ズボン・長そでの上着・ジャンパー等(けっこう寒いです)

肌の露出は避けてください。野外体験活動では必須です。虫除け、そして、雑草により肌に傷がつくのふせぐため。

②日よけの帽子。

③運動靴 履きなれた、汚れてもよいもの。

こちらに来る時は、全員、「そのまま野外体験できる服装」でくること。着替え時間の節約のため。

※9.子どもたちに以下の事を念押しする。

「長そで・長ズボン・運動靴・ぼうし。すいとう・体験バックは肩にかけ、両手は必ず空けること。」

※10.「探検!発見!ガイドブック」

大学で用意し、郵送。子どもたちに事前配布。

※11.往路では以下のタイミングで連絡をもらう。

1)花園携帯は 080-7798-5553。

2)おそらく石川パーキングエリアでトイレ休憩をすることになる。石川パーキングエリアを出るタイミングで一度連絡。

3)最後にもう一度、上野原インターチェンジを出るタイミングで連絡。

※12.バスの運転手に以下を伝達。

グラウンドに入るスロープは傾斜が急で、大型バスの乗り入れは難しいとのことなので、バスは旧桜井小学校前の県道 35 号線に一時停車していただきます。

※13.降車時の注意

一時停車時に降車するので、到着次第、速やかに降車できるよう、身支度してください。降車後は学生の誘導に従ってください。「始めの会」会場に案内いたします。

※14.バスの運転手に伝達。

旧桜井小学校前の公道(35 号線)をそのまま西進したところにある「YLO 会館」の駐車場を利用していただきます。現地までは学生が先導いたします。上野原市から駐車許可をいただいているので、無料でご利用いただけます。ただ、会館周辺はコンビニ等のお店は一軒もありません。飲食物はご用意ください。

トイレ:女子は廃校舎一階、体育館のトイレを使用。

男子は体育館のトイレを使用。

※15.アンケートにご協力ください。

体験活動をより実りあるものにするために、体験活動前と後に参加児童を対象としたアンケートにご協力をお願いいたします。回答内容の

前後比較から体験活動の効果を判定、今後の参考にさせていただきたいと考えております。

7. 実施内容

1)「山」体験学習

以下(1)・(2)・(3)の各ブースの滞在時間は 晴天プラン 10 分、小雨・豪雨プラン 15 分 とする。

(1)グラウンドブース

①フィールドサイン 散策するフィールドにはシカ・イノシシ等が出没する。それらが残したサインを提示し、自然の豊かさについて解説。

②森林の水源涵養 散策するフィールドにはいくつか湧水がある。それを教材にして、森林の水源涵養について解説。

(2)お墓ブース

①里山の杉・檜 里山の景観と植林事業について説明。杉と檜の有用性を解説。

(3)桜井山ブース

①里山の自然 旧桜井小学校裏の山から見える特異な地形と、町並みが教材。自然と共生する人間の暮らし(里山の暮らし)を提示、人と自然環境の結びつきに気づかせる。

2)昼食「川」(含む観察学習)

(1)昼食

秋山川水面より 2m 程度上にある林間で班ごとに昼食。

(2)秋山川の景観

昼食後、上流域の川の景観と流水の働きについて移動しながら解説を聴く。

3)「廃校舎」体験学習

旧桜井小学校の校舎内を使用する(図 1 を参照)。

以下(1)~(6)の滞在時間は

晴天プラン 50 分、小雨・豪雨プラン 65 分 とする。

開始は 1・7 班が(1)、2・8 班が(2)、3・9 班が(3)、4・10 班が(4)、5・11 班が(5)、6・12 班が(6)よりとし、時計回りでローテーション。

(1)音楽室「富岡の棚田」

秋山川を挟み対岸の山の斜面には、棚田が広がる。景観が美しい。秋山一の米どころである。先人の苦労と、棚田に灌漑するしくみについて解説。

(2)4 年生教室「秋山の野生動物」風の子フ〜スケ担当

模型を使いながら野外における生物の観察法について体験的に学ぶ。

(3)理科室「淡水のプランクトン」

フィールドには、いたるところに池、たまり水が点在。そこにいる多種多様な水生プランクトンが教材。ミジンコ等の、かろうじて肉眼で確認できるものを実体顕微鏡で観察。目に見えない世界を提示することで、目に見えることだけが真実ではないことを気づかせる。

(4)2 年生教室「里山と農業」

秋山の農業は、里山の恵みにより支えられている。生態系と人の生

活のつながりを解説、自然環境の恩恵に気づかせる。

(5)3年生教室「森林と酸素循環」

液体窒素を用い、酸素を視覚化する。そして、酸素供給における森林の重要性を解説、自然環境保全の重要性に気づかせる。

(6)図工室「上野原の養蚕文化」

養蚕に使用した古民具を提示しながら、かつて養蚕で栄えた上野原の歴史について解説。

4)屋内ブース 配置図(旧桜井小学校校舎内)

校舎内の「屋内ブース」配置予定は以下の通り。

廊下、階段等には校舎内に保管してある「昔の教材」を展示している。それらについても解説パネルを設置。

旧桜井小学校					
3階	音楽室	6年生	5年生	4年生	理科室
	富岡の棚田	馬がいた 暮らし	上野原の 水棲動物	上野原の 陸棲動物	淡水の プランクトン
	常設展示	常設展示	常設展示	常設展示	常設展示
	(単眼鏡使用)				
			AQUA SHIP 担当	風の子 フヘスケ 担当	
2階	図工室	図書室	3年生	2年生	家庭科室
	上野原と 養蚕	カイコ ふれあい	秋山の 民話	森林と 酸素循環	里山と 農業
	常設展示		常設展示	常設展示	常設展示
			(実体 顕微鏡 使用)	(液体 窒素 使用)	
1階		1年生	校長室	職員室	多目的室
				本部	スタッフ 控室 実習室

図1. 屋内体験ブースの配置図

5)体育館の「動物ふれあい教室」

豪雨等の悪天候により1)「山」体験学習が実施できない場合の代替体験プログラム。

(1)ブースレイアウト例

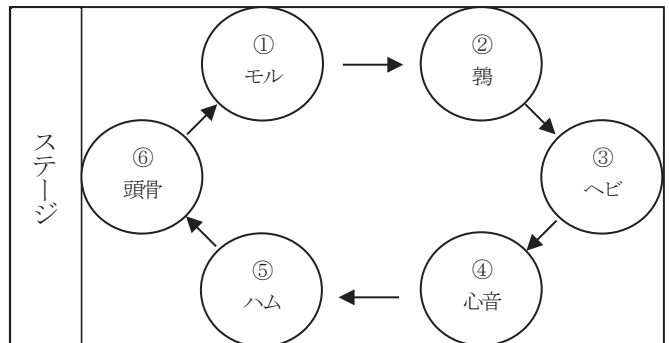


図2. 体育館内のブース配置例

①モル：モルモットのふれあい

②鶉：卵の実験

③ヘビ：ヘビのふれあい

④心音：モルモットの聴診

⑤ハム：ハムスターのふれあい

⑥頭骨：動物の頭骨と食性について解説

(2)タイムテーブル

表2は、体育館で実施する「動物ふれあい教室」の標準的なタイムテーブルである。

表2. 活動のタイムテーブル

時間	内容	備考
10:10~10:15	始めの会(前半)	企画担当学生が実施
10:15~11:15	前半	1ブース9分×6回 (移動込)
11:25~12:05	休憩	昼食
12:15~12:20	始めの会(後半)	企画担当学生が実施
12:20~13:20	後半	1ブース9分×6回 (移動込)

(3)動物ふれあい教室の進行

児童は全体を6班に分け、6ブースに散り、一斉にローテーションする。

(4)ブースローテーション

開始は1・7班が①、2・8班が②、3・9班が③、4・10班が④、5・11班が⑤、6・12班が⑥よりとし、時計回りでローテーション(図2を参照)。

各班には「班付き」役割の学生が配置され、ローテーションを促すとともに、適宜、ふれあいの介助に立ち回る。

(5)各ブースの運営

動物のハンドラーは動物の取り扱いに熟達した学生が勤める。各動物のふれあいの実施前には、それぞれの動物の特性に応じたふれあい

の方法、そして注意しなければならないことを伝える。

6)秋山を楽しむための約束

以下の約束についてはガイドブックに掲載するほか、始めの会でも確認する。

秋山を楽しむための七カ条

- その一 あいさつは、しっかりあかるく元気よく
- その二 先生の話しをよくききしっかり守る
- その三 みんなでなかよく班行動
- その四 自然をそのまま大切に
- その五 観察は、ことば静かに落ち着いて
- その六 自然を感じる・見る・聞く・触れるそして嗅ぐ
- その七 自然を楽しむ心をわすれずに、楽しい思い出持ち帰る

8. 実施の成果

(1)平野小学校

初めの会は体育館で実施した。そのほうが天候を気にせずともよいので、精神的に余裕がもてる。受け入れ側としては、気持ちの余裕をもつことが「リスクマネジメント」に直結するので、今後もこの方針を踏襲する予定である。

野外体験コースは、海拔 300m から 330m ほどの高低差を上り下りする。今年度も真福寺の境内が散策路である。住職のご厚意により、自由に使用させていただいている。お寺の境内とはいえ、起伏に富む山間の地形は都会の、特に平坦な地形である足立区の子どもたちにとって新鮮な驚きとして受け止められる。それ故に散策それ自体が刺激的な体験となっていた。

コースの各所に設ける体験ブースは、毎年、季節性(初秋であること)に配慮したブース展開とするが、今年度は春先より天候が不順で、季節の歩みが遅く、例年ならばとくにピークを過ぎている山百合の花がまだ咲いていた。そこで、今年度は通底するコンセプトを「自然の豊かさ」とし、実体験できることに留意した。各所で実物を手に取りながら説明を聴かされることが、児童にはとても印象深く、また新鮮な驚きをもって受け取られた様子であった。

川観察コースは、小班ごとに学生の引率に従って、校舎前の県道を横断し、約 50m ほど九十九折の小道を降りていく。かつては対岸にわたる唯一の道であった。当時はウマを使用して物資の運搬をしていたそうである。道端には馬頭土がある。そこで行き倒れた馬を慰霊するために設置したそうである。そのことをこども達に聴かせるよう指導した。そのことを聴き、中には手を合わせてなにやらブツブツと吊いの言葉をとなえる児童もいた。

川では、事前に配布した冊子にあるとおりの「生き物探しでビンゴゲーム」を実施。同伴した教諭も実にたのしそうに生き物探しに没頭していた。このところ、「川に入れない」川体験活動を実施しているが、児童の反応を見ると、石をひっくり返して生き物を探すことが、それこそ当たりはずれのあるゲームのようで、十分に楽しそうである。終わりの会は体育館で実施。全く遅滞することなく、予定通りに終了した。

予定よりやや早めのバス到着。時間に余裕をもてたので、始めの会の開始前に「念のため」トイレに行く時間を設けた。到着前に石川サービスエリアでトイレ休憩の時間をとっているの、トイレに立つ児

童はそんなにいないだろうと思っていたが、一人立つとつられるのか、次々にトイレに立ち始め、予想より時間がかかった。次回より、時間的な余裕があったとしてもトイレ休憩は始めの会が終了して、班行動に移ってからにしたほうがよいと反省した。その他事前の打ち合わせ内容は以下のとおり。平野小学校 4 年主任の渡辺先生(女性)は、環境教育にかなり詳しく非常に稀有な存在。聴くと東京農業大学を経て、通信で小学校の教員免許を取得し、今日に至るとのこと。東京農業大学では林学を学び、野生動物にも詳しい。小菅の多摩源流大学の立ち上げにかかわり、ネイチャーゲーム等の知識・経験もある。

- 1.こどもたちの呼び方:男女ともに「名字さん」/学生の呼び方「名字先生」
- 2.名札:ラベルシールに当方で印字。当日にこどもに配布。
- 3.気になるこども:足の悪い子が一名。介護の北野先生が付きそう。
- 4.外部公開用の写真撮影の可否:不可のこどもはそれと分かるように帽子にリボン等の目印をつける。
- 5.水筒:肩掛けの水筒を持ってない子もいる。その無場合は、こどもの手をあげるため、学生があずかる。
- 6.バスの分乗:先頭 1 号車 1 班から 6 班、2 号車 7 班から 12 班
- 7.持ち物:軍手は学生が班の人数分を携行する。防虫スプレーは子どもに持参させるが、学生も携行する。
- 8.体験学習に関すること(以下全て渡辺先生からです)
 - ①学年の目標は自主性を育むこと。
 - ②これから社会科で地形の勉強をする。地図記号は 3 年で学習。
 - ③足立区の小学生は大抵の場合、4 年の 1 学期に東京都水道局の「水道キャラバン」の出前授業を受けた。内容は「水のろ過実験(上水道の水ができる仕組み。水道局の HP で閲覧可。)水源テーマの学習はタイムリー。蛇口をひねればいくらでも水が出てくると思っているので、水のでき方・湧き出し方のテーマは至極適当。今年は洪水で沢の水が少ないということもよい勉強になる。
 - ④足立区の小学生は大抵の場合、3 年の理科でカイコの飼育体験をしている。
 - ⑤足立区の小学校でフールがあるところは、プール清掃をするときに、自然発生した水生昆虫を集めて競うコンテストをしている。ただし、平野小学校はプールが屋上にあるため、水生昆虫の発生が思わしくなく、ヤゴをみたことがない。
 - ⑥フィールドサインを見つけたときは、その周囲に目を配れるようになってほしい。
 - ⑦都会にも身近な自然があることを、この体験をきっかけに気付いてほしい。
 - ⑧自然の中には人の生活に役立つものがあることを知ってほしい。
 - ⑨杉・ヒノキのブースには大変期待している。
 - ⑩地図の読み方の授業にも期待している。
 - ⑪ベイトトラップで虫を集めていただけるのはありがたい。
- (2)千寿常東小学校

朝から小雨模様。小雨プログラムとするか、それとも天候の回復を見込んで晴天プログラムとするか、しばし考えた。準備に影響するし、体験活動の満足度にも関わる。インターネットでの雨雲の動きでは、「必ず晴れる」とは言い切れなかったが、雲の動き・風の強さなどを観て、小雨が降りやまぬ中であつたが、晴天プログラムを決行するこ

とした。到着時は、まだ小雨がぱらついていて、校長先生に「晴天プログラムで行けると思うので、決行します。」と了解を求めた。校長先生からは一言「お任せします。」とお応え。体育館で始めの会を実施。そのうちに雨は上がり、曇り空に。その後、だんだんと薄日がさすようになり、お昼ごろには雲間から青空と太陽が見えるようになり、気温も上昇した。しかし 13 時を過ぎたあたりから、再び空模様が怪しくなり始め、全員を体育館に引き上げ、早めに終わりの会を始めることとした。そして終わりの会の最中に体育館にあたる雨音で声がかき消されるほどのゲリラ的な豪雨となった。小雨→曇り空→晴れ→豪雨と目まぐるしく天候が移り変わる体験活動であったが、野外活動と川観察の全てを予定通り実施することができた。

後日、千寿小の先生より以下のお手紙をいただく。

「8 日の大学遠足では大変お世話になりました。最後の大雨も含めて子供たちには大変印象深い体験になったようです。私も縁あって大学遠足に 3 回参加することができましたが、北千住の子供と同じく、あまり自然に親しんだことがなく育ったこともあり、最初に秋山で体験させていただいた時は驚くことばかりでした。その後も 3 回とも新しい発見があり、個人としても楽しみな行事の一つでした。観光とは違い、日常で触れることのできる自然について、学生の方のいろいろと教えてもらえるのが子供たちにとって良かったのではと思っています。本当にありがとうございました。」

以下、児童からの感想である。

「大学遠足では、山に行って川に行きました。山ではイノシシの食べのこがありました。あ鹿の足あとや水のこをせつ明してくれました。巨大なハチの巣を望遠きょうでみました。トンボもいっぱいいました。川ではカゲロウやサワガニ魚もいました。川に行く前にくま注意というかん板がありました。そしてこわくなりました。でも熊も出ずに川で楽しくできました。あと学校のある所ではたぬきのふんがありました。山もすごくきれい見えました。はちの巣はかんのん様の手にさげているかばんかと思うくらいでかくて中には、黄色いスズメバチがいました。秋山は自然がいっぱいでした。」

見せて聞かせたことの一つ一つがとても印象的であったことが読み取れる感想である。

終わりの会は体育館で実施。各クラスより児童 1 名が代表にたち、学生にお礼を述べた。全く遅滞することなく、予定通りに終了した。待を寄せていた。その他、事前に小学校に出向き打ち合わせをした内容は以下の通り。

1. こどもたちの呼び方: 男女ともに「名字さん」/ 学生の呼び方「名字先生」
2. 名札: 小学校で使用のものを持参。
3. 気になることも: とくにいない。
4. 外部公開用の写真撮影の可否: 不可のこどもはそれと分かるようになにか目印をつけるなど、当日に伝達。その他、どうととてもよい班をつくった。
5. 水筒: 肩掛けの水筒を持ってない子もいる。その場合は、こどもの手をあけるため、学生があずかる。
6. バスの分乗: 先頭 1 号車 1 班から 6 班、2 号車 7 班から 12 班
7. 持ち物: 軍手は学生が班の人数分を携行する。防虫スプレーは子どもに持参させるが、学生も携行する。バスをおり、体験が始まる前に

スプレーさせる。

8. 体験学習に関すること

- ① 今年には言葉の聞き分けの悪い子が多い。中にはぼんやり聴いているこどもがいるので、2~3 年生を相手にするような声掛けをしてほしい。
- ② 楽しくなると周りが見えなくなる子がいる。「ダメなときはダメ」と、後を引くことはないので、厳しく接してほしい。
- ③ こどもには学生を「名字先生」と呼ばせたい。これはかならず。調子にのると歯止めが利かなくなるおそれあり。

(3) 中島根小学校

3 年連続の参加である。おとしは豪雨のため初めて全ての野外活動を断念、昨年は小雨のため川体験ができなかった。今年は幸いにも天候に恵まれ川体験活動ができることとなった。そのことを告げると 3 年連続で引率の校長先生は「3 年越しで念願の川体験がようやくできる」と喜んでいて。

引率の学生は、過半が 2 度目の大学遠足である。ブース内容は前週の平野小・千寿常東小と同様であったので、前回の経験が活き、非常に円滑に体験活動を支援していた。また、前回に色々と子ども達から質問されたことについても事前に答えを用意してきたようで、手際よく対応していた。

プログラム考案のために 8 月の 1 ヶ月はほぼ毎日準備に費やしているが、今年には小学校のグラウンドに初めてシカ・イノシシの足跡を確認。日ごろ地域の情報収集でお世話になっている方々に聴いてみたが「今までそんなことはなかった。聴いたこともない。」とのことだった。そこで今年は野生動物をキーワードに、自然の恵みや豊かさを体験的に学んでもらうことを主要テーマとした。教材には、グラウンド上にはっきりとこの足跡と、補助教材として野生動物の頭骨や食痕等の様々なフィールドサインを上野原小学校の校内ミュージアムより校長先生のご厚意で貸し出していただいて使用した。動物そのものではないが、野生動物の姿を身近に具体的にイメージできるのか、子ども達の関心を大いに惹きつけていた。

川観察では、引率学生の手慣れた支援で、次々と「生き物探しでビンゴゲーム」に掲載された水棲動物を発見、中には、「何匹みつけられたか」と数を競う様子も見られた。同伴した教諭も、子どもたちに交じり、たのしそうであった。「川に入れない」川体験活動であっても、内容的には十分であることが再度確認できた。

終わりの会は体育館で実施。各クラスより児童 1 名が代表にたち、学生にお礼を述べた。全く遅滞することなく、予定通りに終了した。

ほぼ予定通りにバス到着。上野原インターを降り、桂川を渡って県道にアクセスするが、新天神トンネルを抜けてから大型バスでやっと通れる狭さの交通の難所があった。距離にして 250m ほどであるが、一方通行ではないブラインドのカーブがあるので、地元の自家用車と鉢合わせすることがしばしばであった。3 年をかけて迂回路新設の工事が進んでいたが、ようやく仮設道路が完成。9 月に入ってから迂回路が使用できるようになり、利便性が増した。その他、事前に小学校に出向き打ち合わせをした内容は以下の通り。

1. こどもたちの呼び方: 男子「名字くん」・女子「名字さん」/ 学生の呼び方「名字先生」
2. 名札: ラベルシールに当方で印字。当日にこどもに配布。

3. 気になることも: とくにいい。
4. 外部公開用の写真撮影の可否: 不可のこどもは、アンケートで確認。当日に連絡。
5. 水筒: 肩掛けの水筒を持ってない子もいる。その場合は、こどもの手をあけるため、学生があずかる。
6. 班行動: 学生の引率にまかせる。
7. 体験学習に関すること: 全ておまかせします。今年こそ川体験ができるよう願ってます(校長先生談、おとしは豪雨・昨年は小雨)。

(4) 宮城小学校

宮城小学校 4 年主任の先生(女性)は、理系指向(特に生物系)で、環境教育にかなりの関心のある方であった。先生たちは、「この大学遠足は絶対に子どもたちのためになる」と強い信念をもとても期待して楽しみにしていた。子ども達は 3000 円平均のバス代を支払う。その出元は保護者で、時には「3000 円は高い」とのクレームもあるそうである。しかし、先生たちはそう言う保護者を説得して、実現に漕ぎつけているとのことである。学生には事前に先生たちの苦労と期待を聴かせ、「いつもより増して一期一会の精神で」活動に取り組むよう事前に申しあわせた。中島根小学校の実施から中 2 日を念入りの準備にあてた。

今年度は、例年になく天候が不順であった。特に少雨の影響が大きい小学校のグラウンドの片隅にある「岩壁の湧水」が、いつもは湧き水が勢いよくほとばしるのに、水道の蛇口より小出しされている程度にまで水量が落ちていた。90 歳近い古老に聞くと、「今までこんなに水が少なかった。初めてだ。」とのこと。グラウンドにイノシシやシカなどが進出したこともあわせ、昨年までとは色々とプログラムの変更が必要となり、運営にはいつも以上に気がついた。岩壁の湧水のブースは「大地の恵み命の水」と表題を変え、水量のかぼそさから水の大切さが伝わるようにと内容を変更した。蛇口をひねるといつでも簡単に手に入る水が、水源をたどるとこんな少量から始まるという演出は、こどもにもとどいた様子がうかがえた。

川観察は、9 月 7 日平野小学校、8 日千寿常東小学校、11 日中島根小学校について期間を開けず今年度 4 回目の実施となった。2010 年からの大学遠足事業であるが、雨降り等で、今まで 4 回連続しての川観察は実施したことがなかった。川の生物の現状を心配したが、各回とも「キャッチ&リリース」を徹底したことが奏功したのか、採集できる生き物の種類・数ともに連続して実施の影響は感じられなかった。子どもたちは、引率学生の手慣れた支援で、次々と「生き物探しでビンゴゲーム」に掲載された水棲動物を発見していた。子どもたちの歓声に引率の宮城小学校の先生たちも満足そうであった。

終わりの会は体育館で実施。各クラスより児童 1 名が代表にたち、学生にお礼を述べた。全く遅滞することなく、予定通りに終了した。ほぼ予定通りにバス到着。その他、事前に小学校に出向き打ち合わせをした内容は以下の通り。

1. こどもたちの呼び方: 学生さんが呼びやすいように好きにやってください。こだわりはありません。/ 学生の呼び方: 名字先生。
2. 名札: 子どもたちに名札を自作させて持参。
3. 気になることも: とくにいい。
4. 外部公開用の写真撮影の可否: 不可のこどもは分かるようになにか目印をつける。

5. 水筒: 肩掛けの水筒を持ってない子もいる。その場合は、こどもの手をあけるため、学生があずかる。
6. 班行動: 学生の引率に任せる。
7. バスの分乗: 先頭 1 号車 1 班から 6 班、2 号車 7 班から 12 班
8. 持ち物: 軍手は学生が班の人数分を携行する。防虫スプレーは子どもに持参させるが、学生も携行する。
9. 体験学習に関すること(以下全て主任の先生から)
 - ① キャリア教育も兼ねた体験にしたい。学生さんには自分の好きなこと・関心のあることをどんどんこども達に話してほしい。「勉強はきらいだったけど、好きなことをやりたりので、頑張って大学に入学した。」などの体験話などは、宮城小学校のこどもには、勉強の動機づけになるのでありがたい。
 - ② 理科が大好きな子どもが多い。対比して社会科はきらい。
 - ③ 昆虫との出会いに期待。色々な生き物を見せたい。自然科学系のウンチクは色々と言ってほしい。
 - ④ 植物が好きな子、育種に関心のある子、図鑑ばかり見ている子など、特定のことに強い関心とかなりの知識を持っている子がいる。専門的な話を聴かせたい。
 - ⑤ キッザニア東京に行き、職業の体験学習をしてきた。そのために申請書を書いて予算をもらった(このエピソード、普通の小学校の先生にはなかなかできない。教育に熱心な子どもに寄り添った先生であることが伝わる。)
 - ⑥ 自然体験に行かない・関心がない家庭の子どもが多い(今回の遠足の実現に向けて保護者対応に苦労した模様)。休日はショッピングモールで過ごすような子どもが多いので、この機会に自然に関心を持つようになってほしい。
 - ⑦ それとは反対に自然体験に強い関心をもつ家庭もあるので、両極端。

(5) 千寿小学校

千寿小学校の校長先生は理科教育がご専門で、環境教育にも強い関心がある。大学遠足については「本物の自然にふれられることの子供に対するインパクトの大きさ」を高く評価していた。11 月 18 日に帝京科学大学の千住キャンパスで開かれる動物介在教育・療学会に「活動を受け入れる(依頼する)立場(足立区教育委員会)」と「活動を実行する立場(帝京科学大学)」の代表として花園ともども講演することになっていたが、講演が大学遠足実施後 10 日と空けてないので、リアルな話題提供ができるであろうということで、話題提供の一つに取り上げることとしていた。

9 月の活動は、少雨の影響で、ブース内容に改変を加えたが、その後、各地で水害を及ぼした豪雨が続き、岩壁の湧水の水量は完全復活していた。さらに、この豪雨時に秋山川の水位が平常時よりも 3 メートル程度上昇、川の形を変えるほどの濁流と化した。11 月の活動時には水位はほぼもとどおりにながっていたが、川べりに浸食等の増水の痕跡や上流から押し流されてきたらしい転石が目についたので、5 年生の理科の単元にある「流水のはたらき」の教材として活用することとした。そのため、晴天であれば、全員が川べりにおいて、昼食をとり、その後川の景観を観察するプログラムとした。また、11 月の気温低下を考慮に入れ、全部を野外とするのではなく、廃校舎内の体験ブースも晴天・雨天に関わらず活用する組み立てとしたので、時間を確保するために、いつもは 6 ブースを展開する野外体験を 4 ブースと数

を減らし、さらに順路をいつもの三分の二程度になるよう短縮、移動時間を削減した。

川の景観観察に際しては学生には理科の単元内容を解説するとともに、現地まで事前に赴き観察のポイントを伝えた。初めての試みであったが、濁流時の写真を提示すると眼前のきれいな流水とのギャップと、そこいらじゅうで確認できる流れる水の力強さがずいぶんと印象的な様子であった。

また、引率の学生も含め 100 名超の児童・学生が川べりでお昼ごはんを食べるスペースを確保するため、河原から 2 メートル程度上の雑木林を整地した。雑木林の所有者を秋山の青年会を通じて特定、整地の許可を取り付けた。草刈り、小木の伐採から始まる整地には 1 週間程度かかった。当日は、木洩れ日が気持ちよく、川の景観を眺めながら昼食がとれ、児童と引率の先生、そして引率の学生にも好評であった。

廃校舎内では、液体窒素を使用した「液体酸素の演示」が大好評だった。校長先生からも「完璧な演示」との好評をいただいた。また、初めての試みとしてカイコの孵化の瞬間も観察させた。以下は児童の感想である。

「〇〇〇先生木曜日は大学遠足ありがとうございます。たのしい遠足になりました。たのしかったです。カイコの生まれるしゅんかんや液体窒素とかおもしろかったです。川の前でごはんもおいしかったです。とくにうれしかったのはりすのくみの食べかけがうれしかったです。またいきたいです。」

ほぼ予定通りにバス到着。その他、事前に小学校に出向き打ち合わせをした内容は以下の通り。

1. 子ども呼び方: 男女とも「苗字 さん(例: 田中さん)」/ 学生の呼ばせ方「苗字 先生(例: 鈴木先生)」
2. 子どもの名札: データをいただくので、当方でシールに印字し、当日に配って貼ってもらう。
3. 気になる子ども: 特にいない。
4. 足の悪い子ども: いない。
5. アレルギー: 後日、名簿に記載して知らせる。
6. 写真: データを学校にわたすもの(班付きの学生がとる写真)は自由に撮って構わない。HP 等に乗せる場合は不可の子どもがいるので注意。わかるように帽子にテープを貼るなど目印をつける。

終わりの会もグラウンドで実施。何名かの児童に感想を述べてもらった。最後に児童全員からのお礼の言葉をいただいた。全く遅滞することなく、予定通りに終了した。

参考文献

- 1) 花園誠, 金子智恵理, 河合樹菜, 蛭田多美慧, 青木直樹, 榊原健太郎, 古瀬浩史 (2015). 「足立区の小学生を対象とした環境教育の実践と成果」. 『帝京科学大学紀要』, 11, pp201-213.
- 2) 花園誠, 木村龍平, 青木直樹, 榊原健太郎, 古瀬浩史 (2015). 「足立区の小学校 4 年生を対象とした環境教育の実践と成果」. 『帝京科学大学教職指導研究』, 1 (1), pp237-244.

「大学遠足」による児童養護施設の支援実践と成果

花園誠（教育人間科学部 こども学科）

石木めぐみ・石出渉・副島立（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

榎原健太郎（総合教育センター）

キーワード：児童養護施設、足立区教育委員会連携事業、大学遠足

1. はじめに

本学の児童養護施設に対する支援活動は、2004年から始まる。とある研究会で本学のアニマルサイエンス系サークル「動物介在活動部」の老人養護施設における（いわゆる）アニマルセラピー活動を知った関東圏内の短期大学教員の申し入れが契機であった。保育士資格取得のため、実習先として関東圏内のとある児童養護施設に学生を送り出す、学生と施設児童との人間関係で色々と問題噴出、悩んだ末の申し入れである。「助けてほしい。動物が介在することで入所児童の心のケアができれば、人間関係は好転するかもしれない。」今になって思い返すと、藁にもすがる思いの切実な打診であったろうと、その心情を察することができる。

そして、動物介在活動部の学生による定期的な訪問ボランティア活動が始まった。何度目かの訪問活動のあとである。今度は、当の動物介在活動部の学生が筆者に助けを求めてきた。曰く「手に負いかねる」。だが、そんなに深刻な問題とは受け止め「られ」なかった。当時の筆者は、というと本学に着任するまでの細胞工学系の研究を色濃く引きずって、配属された学生には細胞工学系の卒業研究を指導していたし、アニマルサイエンス実習では動物細胞の培養実習の指導を一手に引き受け、いわば「真正の理系教員」だったからである。すなわち児童養護施設をめぐる諸相について、当時の筆者は、全くの門外漢であった。なんの事情も知らぬまま「動物介在活動部の学生の課外活動の場所が維持できればいい。」と、学生に誘われるまま、当時は新興であった「動物介在教育研究会（後の動物介在教育研究部）」の学生と、ボランティア活動に、それこそ「ボランティアのボランティア気分」で出かけたのである。

2. 問題の始まり

さて訪問して目にしたのは、動物介在教育研究会の活動を通じて知っていた子どもたちとは「明らかに違う子どもたち」であった。我々は彼らにしてみたら、全く見知らぬ訪問者であるはずなのに、なんの躊躇もなく対人距離を詰めてくる。そうかと思うと、今度はスイッチが切れたように対人関係を、それこそ一方的に、切ってしまう。全く振り回されてしまった。なるほど「手に負いかねる」。

帰路につき、動物介在教育研究部の学生と議論した。「何が問題の根なのだろうか。」そして、2005年、大学院に進学したアニマルサイエンスの1期生もメンバーに加え、動物介在教育活動に用いる小動物を持ち込み、再度の訪問にチャレンジした。しかし、子どもたちの態度は、変わらない。ただ、この時は、事前に施設職員より「今の児童養護施設」がかかえる問題についてレクチャーを受けての訪問であった。「親がいるのに親と暮らせない子どもが過半」。我々の子どもたちに

対する印象は変わっていた。

3. 支援企画の立案まで

大学院の授業で「児童養護施設の問題」を取り扱うことにした。講義ではそれぞれが体験したことを持ち寄り「子どもたちの心情を読み解くべく」議論を重ねた。ちょうどよくアニマルセラピーがご専門で精神科医の横山章光先生が本学に着任したばかりの時に、児童の心理についてのレクチャーも受けた。我々がすべきことはなんだろう。何ができるだろうか。そして導いた結論が、入所児童に「自己肯定観」をもってもらえるような訪問活動である。「たとえるならば、雨が降ろうが雪が降ろうが、とにかく無償の訪問活動を続けること。何も見返りを求めず訪問し続けることで、彼らは自分自身のそうされる価値に気づくときがくるのではないか。それは自己肯定観の芽生えとなるに違いない。」それは、幻想にも似た甘い考えかもしれないが、とにかくそのようにして今に続く支援活動が始まったのである。以下は、その当時の窓口となった教員に充てた筆者からの質問メールに対するその教員からの回答である。

（筆者より）Q1. 先日の学内の反省会で、帝京科学大学より4団体が個別に参加するという形式ではなく、帝京科学大学が1まとまりで参加するという形式のほうが動きやすいし大学内の連絡も密にとれるので好ましいという結論になりました。ボランティア参加人員はなるべく固定し月代わりで色々なメニューを提供、必要場合は適宜スペシャリスト（例えばストリートダンス）をゲストとして招くといった運営方式です。この場合、参加人員がゲストの分かさがみえますが、構わないでしょうか？

A1. いいですね、この方法ですと、参加する学生さんの運営意識が高まる点、施設の子どもの認知度が高まる点、双方にメリットがあり、とてもいいのではないかと思います。ただ、遠方ですので固定する学生さんの負担が大きくなりませんか心配です。

（筆者より）Q2. 今度8月28日に環境教育が予定されていますが、来週、主担当の学生が現場に視察に行きます。ついでにその学生に施設の先生と環境教育の運営方法について打ち合わせをさせたいのですが、構わないでしょうか？日にちは来週の3、4、5日のいずれかを考えています。

A2. よろしく願いいたします。打ち合わせ日程は施設と調整してください。私は28日～〇〇学会で〇〇に行くので拝見できなくて残念です。

（筆者より）Q3. 2と関連して、これからの施設とのやりとりですが、もしお許しいただければ、施設の担当の方と直接連絡をとりたいと考え

ているのですが、いかがでしょうか?もちろん、そのやりとりの内容は先生にもお知らせいたします。いかがでしょうか?

A3. よろしく願いいたします。施設側の帝京科学大学受け入れ担当は男児棟主任の〇〇さんです。〇〇さんと事前訪問日程も相談してください。そろそろ職員が交替で夏期休暇を取るので、花園先生や学生の希望日とうまく合致するかどうか懸念されますが・・・。

(筆者より)Q4.3と関連して、これからの本学の窓口ですが、帝京科学大学として1まとまりにしたいので、窓口は1つにする予定です。とりあえず、〇〇君が花園のどちらかということにしておきます。

A4. ありがとうございます。花園先生と〇〇さんがとてもよくしてくださるので、すっかりお任せできて私も助かります。

4. 2006 年、支援活動の展開

この支援活動に参加していた学生の発案により、児童養護施設の小学生・中学生・高校生の全員と職員を学園祭に招待する企画が持ち上がった。大型バスをチャーター、費用は大学の負担である。あわせて、子どもたちには学園祭で自由に飲食できるようにと、学園祭出店ブースで限定して使用できるクーポン券を一人一冊プレゼントした。引率は、訪問ボランティア学生の役回りである。およそ3~4人に2人の割合で学生がついた。そして、この間、施設職員の皆様には「フリー」となっていた。およそ2年間にわたる継続しての支援が奏功し、入所している子どもと学生の間には信頼関係が芽生えるとともに、施設職員も好意的に我々を迎えてくれるようになっていたのである。

学園祭開始にあわせ、朝10時に大学着、引率の学生が歓待した。帰路につくのは午後3時。滞在時間はおよそ5時間程度であったが、子どもたちはそれぞれが存分に学園祭を楽しんだ。後日、施設職員から帰路の車中で高校生が「大学っていいなあ。進学してみたい。でも無理かな」と半ば嘆息するように独白していたと聞かされた。入所している児童は、中学、高校と進学し、その先はお退所して自立である。それ故に入所している児童は、高校卒業後の進路は当然のように「就職」と決めていて、高校に在籍中は、仕事を覚えるためと自立のための資金作りのためにアルバイトするのが習いであって、勉強は、というとおそろかになりがちなのが課題であった。施設職員はその独白を受け「無理なことはない。勉強しさえすれば、大学進学の道もある。」と励ましたそうである。この時以降、入所している子どもたちの中に将来の進路として大学進学も意識も芽生える。「大学は自分達とは関係のない世界」と当たり前のように進路から除外していた子どもたちの、施設職員の方に言わせると、「とてもありがたい気持ちの変化」であった。この気持ちの変化は現実のものとして実を結ぶ。この施設より実際に大学に進学する高校生が現れ始めた。2017年には国立大学の進学者も輩出する。毎年の学園祭招待が思いもかけず「キャリア教育」になったのである。

5. 足立区教育委員会との連携事業「大学遠足」の新展開

2010年に試験的に始まり、2011年からは正式に事業化された「大学遠足」も2017年度で7年目を迎えた。この間、窓口は学校教育課から体験学習課にと変わり、学校の教育現場を離れての支援も模索され始めていた。

2015年7月と11月、足立区は貧困対策を目的として「子どもの健

康・生活実態」を調査した。対象は足立区全小学校69校に通う1年生5,355人の児童の保護者である。本調査では「生活困難家庭」の定義を以下の3項目「(1)世帯年収300万円未満、(2)生活必需品の非所有(子どもの生活に必要な物品や5万円以上の貯金がないなど)、(3)過去1年間に水道・ガスなどのライフラインの支払いが困難だった経験がある」のいずれかに該当する世帯とした。

その結果、「生活困難」は実に24.8%となることが判明、この支援が急務となった。

2017年、「大学遠足」の何回かをこの対策の一環として実施できないかとの打診を受けた。通常の「大学遠足」では、バスチャーター代は、人数割りで保護者負担であるが、「支援企画の性質上、チャーター代は保護者負担とはせず事業予算からの捻出としたい」との提案である。課題は、どうやって対象家庭を絞り込むかであったが、募集方法は発案の担当者に一任とし、提案を受け入れることとした。いざ実施となった場合、子どもたちを預かる立場としては、通常の「大学遠足」と同様に環境教育支援のために活用している桜井小学校を拠点とした自然体験で受け入れるつもりでいた。

提案を受け入れたものの、7月になっても対象が決まらず、どうするのだろうと心配していたところ8月も下旬に入り「児童養護施設を対象としたい」との連絡を受けた。以後、メールで10回を超えるやり取りがあり、実施日は11月25日(土曜日)と決定した。

「児童養護施設が対象か」とどのように支援するかと考えながらのやり取りを重ねるうちに、通常の「大学遠足」ではなく、10年を超える実績がある「学園祭招待方式」もあると考え始めた。ただ、腹案のままとして、11月10日の児童養護施設職員と足立区の担当職員が一堂に会する「最後の詰めの会議」まで留め置き、その場で代替案として提示した。「遠足の目的地を秋山の桜井小学校とするのではなく、上野原キャンパスではどうか。半日滞在できるのであれば、上野原キャンパスは周囲の自然が豊かで、地元の小学校等の人気の遠足スポットとなっているし、大学と自然の両方が体験できる。」

実施日まで2週間を残すのみの時点での企画変更の提案であったが、受け入れていただいた。受け入れ準備する立場からすると、キャンパス内であればたとえ準備期間が短くなったとしても充実した内容を提供できるとの自信があった。

6. 大学遠足による「児童養護施設」支援

1) 参加者

支援対象の児童・生徒は19名の予定であったが、体調不良等で2名が欠席、17名対象の活動となった。全体を3名ずつ(1班のみ2名)の6班編成とした。班員構成は施設職員にお願いした。施設からは職員6名が引率のために参加した。さらに児童養護施設の支援は、今回が初めての試みということで、事業の有効性を見届けるために足立区役所の関係部署より職員6名が参加した。

学生は千住キャンパスより9名、上野原キャンパスより25名が参加した。千住キャンパスの9名は、足立区内のバス会社より大学がチャーターした53名乗りの大型バスに添乗、上野原キャンパスまでの道中を児童とともにした。

2) 活動の概要

体験活動の場所は、「いこいの広場」・「本館棟2階」・「学生食堂」・「うまセンター」・「実験研究棟」の5カ所である。活動プランは「晴天等でコンディションが良く、屋外が利用できる場合(晴天プラン)」と「雨等で屋外は利用できない場合(雨プラン)」のどちらかを基本とし、ベストの体験活動になるように、状況に応じて利用する体験活動の場所を取捨選択する柔軟性を持たせた。そして、時間帯ごとに体験活動のエリアを限定したうえで、大学生と一緒にスタンプラリー形式とした。

活動時は、班行動を原則とするが、児童・生徒に一人に一人の学生を引率役とするマンツーマンの支援体制としたので、児童・生徒の意思を最大限尊重する「ゆるやかな班行動」とした。

班付きの学生はデジタルカメラを携行、児童・生徒の求めに応じて、「人物・風景」等を撮影する。撮影データ(SDカード)は、帰路につく直前にプレゼントとして渡し、まとめ学習等にご活用してもらうこととした。下さい。

3) 活動スケジュール

①到着から始めの会まで

10:00 バス到着

10:10 はじめの会(晴天 いこいの広場/雨天 本館棟2階講義室)班ごとに整列。上野原から合流する引率の学生を紹介。

②晴天プラン」の体験学習

10:15～10:30 「ウエルカムドッグショー」(いこいの広場)

ドッグトレーナー研究部の学生と犬によるパフォーマンスを見学。

10:35～12:35 「科学の祭典 in 上野原キャンパス」(本館棟2階・いこいの広場)。本館2階の体験して学べる科学実験及び工作ブースを自由に巡る。いこいの広場では11時20分ごろまでドッグショーを継続。

12:40～13:20 「学食体験」(学生食堂) 班ごとにテーブルにつき、学生といっしょに昼食。学食利用のために児童・生徒の全員に一人500円の食券を配布した。

13:30～15:00 「ふれあい乗馬体験」(うまセンター) (うまセンターまでは大型バスで移動)2班が1組になり、「乗馬体験」・「ふれあい動物教室」・「自然観察」を3ブースローテーション。

15:10～15:05 終わりの会(うまセンター前広場で実施)

15:05～15:10 写真撮影

15:20～ バスに乗車

15:30 出発

③「雨プラン」の体験学習

10:15～12:15 「科学の祭典 in 上野原キャンパス」(本館棟2階) 本館2階の体験して学べる科学実験及び工作ブースを自由に巡る。

12:25～13:05 「学食体験」(学生食堂) 班ごとにテーブルにつき、学生といっしょに昼食。

13:15～14:15 「ふれあいキャンパス見学」(実験研究棟) 班ごとに学生の案内で大学の施設内の見学およびふれあい動物教室を体験。

14:30～15:00 「ふれあいうま世話体験」(うまセンター) (うまセンターまでは大型バスで移動)3班が1組になり、「ふれあいうま世話

体験」・「自然観察」を2ブースローテーション。

④終わりの会から出発まで

15:10～15:05 終わりの会(晴天:うまセンター前広場で実施、雨天:うまセンター前広場に設営した大テント内で実施)

15:05～15:10 写真撮影

15:20～ バスに乗車

15:30 出発

11月25日は好天に恵まれ、「晴天プラン」での実施となった。

4) 午前の体験内容

①ウエルカムドッグショー(いこいの広場)

ドッグトレーナー研究部の学生が担当した。オビディエンス(服従訓練)の実演から始まり、ドッグウォーク・Aフレーム・チューブトンネル・ハードル・シーソー・ウィービングポールを配置したアジリティ(イヌの障害物競争)、そしてディスク競技(frisbeeをハンドラーが投げイヌがキャッチ)と、日頃の鍛錬の成果を披露してもらった。

②科学の祭典 in 上野原キャンパス(本館棟2階)

・工作コーナー(201教室) 動物介在教育研究部の学生が担当。発泡スチロール蝶々(薄くスライスした発泡スチロール板を蝶々型に切り、滑空させて遊ぶ)・ペットボトルジャイロ(ペットボトルを輪切りにして投擲体をつくり、的宛てをしてあそぶ)・ダンゴムシ迷路(ダンゴムシの交替制転向反応を利用した迷路工作)・繭クラフト(蚕の繭で作る人形工作および蚕とのふれあい体験)。

・イヌのふれあい(202教室) ウエルカムドッグショーで活躍してくれたイヌとのふれあい体験。

・ふれあい動物教室(203教室) 動物介在教育研究部の学生が担当。足立区小学校の生活科授業支援で活躍するハムスター・モルモット・ウサギ・スナネズミ・アオダイショウ・フトアゴヒゲトカゲ・ギリシアリクガメ、そしてガラルファ(ドクターフィッシュ)とのふれあい体験と動物の習性・生態の学習。

・不思議!体験!科学の世界(アニマルサイエンス第一実習室) 動物介在教育研究部の学生が担当。岩石標本作り(上野原市内産の堆積岩・火成岩・変成岩による自分だけの岩石標本作り)・スライム(PVA洗濯糊とホウ砂で作る)・超低温の世界(液体窒素を使った凍結実験と超電導実験など)・台所でできるDNA抽出実験(ブロッコリー・食塩・中性洗剤・薬局で購入の無水エタノールによる簡単なDNA抽出実験)・台所雑貨で作る極小カミナリ(プラスチックコップ・ストロー・アルミホイルで作る帯電体と塩化ビニールパイプによる静電気実験)・台所でできる風船実験(食酢と重曹により二酸化炭素を発生させ風船を膨らませる実験)・微生物の世界(実体顕微鏡、倒立顕微鏡で観察する淡水プランクトンの世界)

・休憩コーナー(204教室) ジュース・お茶・コーヒー・お菓子などでおもてなし。

以上の5教室で時間いっぱい自由行動とした。工作物は全て持ち帰ってもらった。

5) 昼休みの体験内容

・学食体験(学生食堂) 児童・生徒にこの日だけ利用できる500円分の食券をプレゼント。そば・うどん・ラーメン・カレーライス・定食等

の定番メニューから好きなものを選んで食べてもらった。

6) 午後の体験内容

- ・乗る・うま乗馬体験(ウマセンターの馬房・馬場内) 乗馬体験(うまセンター職員指導による乗馬体験:図1)・引馬体験(うまセンター職員指導による引馬体験)・ウマとのふれあい体験(えさやり、ブラッシングなどの体験)・馬房掃除(馬のお世話体験)
- ・自然観察(うまセンター前広場で確認できる足跡:図2、食痕など野生動物のフィールドサインの観察)
- ・アウトドアクッキング(うまセンター前広場で焚火して、焼き芋づくり、パン焼き体験、マシュマロ焼きなど:図3)
- ・自然工作体験(ススキでつくるフクロウの工作:図4)
- ・迷路遊び(うまセンター前のススキ野原を刈り込み、中に複雑に入り組んだ小道をつくる。その中で鬼ごっこ等の遊びをする。)

たき火の回りには長椅子を並べ、適宜、休憩できるようにした(図5・図6)。また、たき火のそばにはテーブルを配置し、お茶・お菓子・コーヒー・ココアなども用意して、自由に利用できるようにした。



図1. 乗馬体験



図2. うまセンター前広場で確認できたイノシシの足跡



図3. アウトドアクッキング



図4. 自然工作体験



図5. うまセンター前の様子



図6. 児童・生徒を見守る。

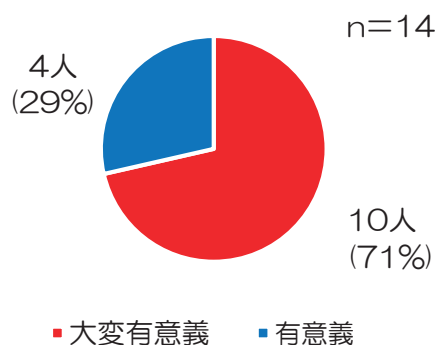


図10. 参加した学生の感想「有意義だったか」

7. 実践の成果

1) 実践後にいただいた感想の集計

図7～10は、実践後にいただいた感想の集計である。参加しての感想は、児童・生徒の17人中16人が「とても楽しかった」と感想を述べていた(図7)。また、大学生と過ごしての感想は、17人中15人がとても楽しかったと感想を述べていた(図8)。引率の職員、そして受け入れた学生については、全員が「たいへん有意義」あるいは「有意義」と感想を述べていた(図9、図10)。

2) 児童・生徒の感想

以下は、参加した児童・生徒から寄せられた感想である。

「楽しかったです!!またいきたいです。」(小学校低学年)

「えんそくに行けてよかったです。楽しく工作ができました。ありがとうございました。」(小学校低学年)

「とても楽しいことよういしてくれてありがとうございました。またこんどもいきたいです。」(小学校低学年)

「いろいろな人と話せて楽しかった。また行きたいと思いました。」(小学生高学年)

「モルモットがいちばんかわいかったです。大学の人になりたいです。」(小学校高学年)

「自然がいっぱいあってすごく良いと思いました。いろいろな体験ができて楽しかったです。私が大きくなったら大学に行きたいと思いました。」(中学生)

「また行きたいです。実験をしたいです。DNAの抽出が楽しかった。また家でやってみたいです。」(中学生)

3) 施設職員の感想

以下は施設職員から寄せられた感想である。

「科学から自然、人のふれあいまで盛りだくさんで楽しかったです!」

「たくさんの経験をすることができ、また学生たちの手作り感が温かく歓迎されている感じがあって感動しました。」

「ヘビやトカゲまでこれまで触れたことがなかったのでよい経験になりました。(中略)全ての活動において学生さん、先生、区の方の子どもたちへの気持ちが伝わってきました。(中略)楽しい一日を本当にありがとうございました。」

「子供たちの興味関心を引き出すと共に、人のつながりの大切さや、手作りの温かさを感じられる企画でした。機会があれば是非また参加

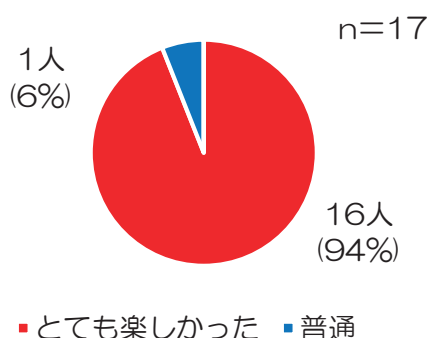


図7. 参加した児童・生徒の感想1. 「参加してどうだったか」

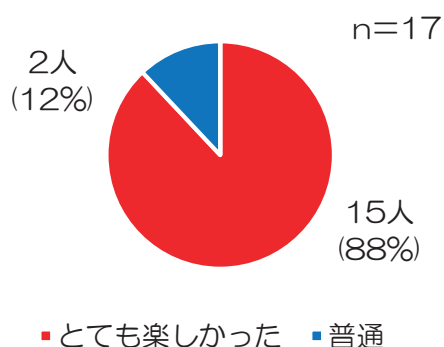


図8. 参加した児童・生徒の感想2. 「大学生といっしょにいてどうだったか」

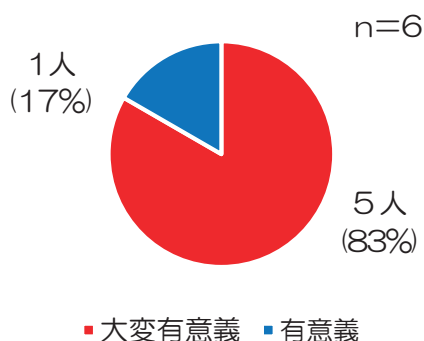


図9. 参加した施設職員の感想「有意義だったか」

させていただきたいと思います。」

「楽しそうに様々なものにチャレンジする子どもの姿がみられて何よりも嬉しく思いました。ありがとうございました。」

「今回、この企画のお話を下さり、ありがとうございました。継続的に実施できると小学生のいい自立支援プログラムになると思うので、今後とも是非よろしく願いいたします。」

お礼の色紙に合わせ、施設職員よりお手紙を頂戴した。

「帝京科学大学花園先生学生の皆さん

先日は、大学遠足ありがとうございました。子どもたちはもちろんのこと、職員にも大好評で、とても楽しい一日を過ごさせていただきました。子どもたちからも「また行きたい」という声が大変多く聞かれています。ぜひ継続的に実施できたらと思っています。子どもたちと職員でお礼状をつくりました。よろしければ学生の皆さんと一緒にご覧ください。」

8. 今後の展望

児童・生徒、施設職員、足立区職員、そして支援参加の学生の全てから好評の活動であった。ただし、全く反省点がなかったわけではない。往路・復路ともに千住キャンパスの学生を添乗としたが、施設職

員からは「バスレク(バス内のレクリエーション)があるとよかった」との意見があった。

2018年度は当初に予定していた「生活困難家庭」を招待することも計画されている。児童養護施設からは継続が希望されているので、必然的に回数を増やさなければならない。11月はスケジュールが過密なので、実施時期をいつにするか、今後の課題である。

9. 謝辞

本実践を行うにあたり、ご協力いただきましたうまセンターの喜久村徳淑先生ならびに洲上真帆先生そしてうまセンターの学生の皆さんに心からの感謝を申し上げます。また、活動にご参加くださいました児童養護施設の皆様、ご協力くださいました足立区職員並びに帝京科学大学地域連携室職員の皆様、そして大学遠足の実践に携わったドッグトレーナー研究部ならびに動物介在教育研究部の学生の皆様、花園研究室の皆様に心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。



図 11. 児童・生徒そして職員から寄せられたお礼の色紙